河南町文化財調査報告書　第12集

細田遺跡

—細田採石工事に伴う事前調査—

平成14年12月

宮城県河南町教育委員会
丸興産業株式会社

細　田　遺　跡

—細田採石工事に伴う事前調査—

発　刊　の　辞

この度、平成13年度に発掘調査を実施した「細田遺跡」について、その成果をまとめた調査報告書を刊行いたします。

この調査は、細田遺跡に所在する丸興産業株式会社の採石工事に伴うもので、遺跡が須江丘陵に位置することから、須江窯跡群との関連も指摘されていました。

細田遺跡は、平成3年12月に石巻文化センターの中村光一氏（当時）より細田山共同葬祭場北側の沢で土器を発見した旨の連絡を受け、河南町教育委員会が現地を確認し、遺跡として所管の宮城県教育委員会に届け出たものです。

今回の調査では、９世紀後半ごろと推定されるロクロピットを伴う住居跡（工房跡）が検出されたことが注目されます。精製された白色粘土塊や、作業台として使用したと考えられる加工石、そして小型の土師器甕（作業で手を濡らすために水を入れたもの？）がロクロピットと一組になって出土しており、土器製作工房として数少ない資料が得られました。

また、河南町に隣接する矢本町で発掘調査が行われている赤井遺跡は、牡鹿郡衙か、牡鹿柵の最も有力な推定地といわれています。この遺跡に須恵器や土師器を供給していたのが、須江丘陵だと考えられています。

今年の８月４日に『矢本町文化講演会』が開催され、赤井遺跡について、東北学院大学の熊谷公男先生の興味ある貴重なご講話を聞くことができました。

７２４年（神亀元年）の多賀城創建の頃、古代牡鹿郡が成立したといわれており、牡鹿郡衙のあったとされる矢本町と須江窯跡群の所在するわが河南町は、古代より密接な関係があったのだと考え、あらためて古のロマンに浸ることができました。

さて、今回の調査結果が須江窯跡群や赤井遺跡、また関連する遺跡等の研究解明に少しでも参考になれば幸いに思います。

最後に、発掘調査にご指導ご協力をいただいた方々、報告書の発行に向けて整理作業に携わっていただいた方々、そして多大なるご配慮をいただいた丸興産業株式会社に対して、心から感謝の意を表し、発行の辞といたします。

平成14年12月

河南町教育委員会

教育長　斎　藤　龍　雄

例　　言

1. 本書は，丸興産業株式会社による細田採石工事に伴う埋蔵文化財発掘調査として，実施された調査の報告書である。
2. 発掘調査は、次の要項で実施した。
［遺 跡 名］　細田遺跡（遺跡番号：69052）
［所 在 地］　宮城県桃生郡河南町須江字細田 89，90，91 番地
［調査対象面積］　20,678 ㎡（調査面積　約 5,700 ㎡）
［調査期間］　平成 9年 8月 28 日～平成 9年 9月 4日（確認調査）
平成 10 年 11 月 4日～平成 11 年 11 月 6日（〃）
平成 11 年 10 月 19 日～平成 11 年 10 月 22 日（〃）
平成 13 年 10 月 15 日～平成 13 年 12 月 7日（事前調査）
［調査主体］　河南町教育委員会
［調 査 員］　河南町教育委員会社会教育課　主査兼社会教育主事　中野裕平（平成 14 年 3 月 31 日まで）
同　　主事　市川洋一
3. 調 査 指 導 ：宮城県教育庁文化財保護課
4. 発掘調査にあたり，次の方々から指導・協力をいただいた（敬称略）。
［発掘調査］　宮城県教育庁文化財保護課：真山悟，阿部博志，後藤秀一，天野順陽，高橋栄一
矢本町教育委員会：佐藤敏幸（整理作業も）
河南町糠塚行政連絡区長：及川久六
陶芸家：故遠藤卓一郎，遠藤寿哉
［整理作業］　東北歴史博物館：高野芳宏，山田晃弘
宮城県多賀城跡調査研究所：古川一明
仙台育英学園高等学校：渡邊泰伸
青森県東北町教育委員会：古屋敷則雄
〃　野辺地町歴史民俗資料館：田中寿明
〃　五所川原市教育委員会：佐藤文孝，藤原弘明
岩手県北上市埋蔵文化財センター：沼山源喜治，稲野裕介
〃　水沢市埋蔵文化財調査センター：伊藤博幸
秋田県埋蔵文化財センター：柴田陽一郎
山形県埋蔵文化財センター：長橋至
福島県文化財センター白河館：石本弘
〃　鹿島町歴史民俗資料館：佐藤友之
〃　会津若松市教育委員会：石田明夫
5. 調査・整理参加者　派遣社会教育主事 青木敏彦，伊藤とも子，加藤清子，川田久美子，佐々木智加，佐藤照夫，丹野幸子，梁取広佳
6. 報告書作成にあたっては，次の者が作業を分担した。
［遺物実測］　中野裕平，川田久美子
［遺物トレース］　伊藤とも子，川田久美子，丹野幸子
［遺構トレース］　伊藤とも子，川田久美子，丹野幸子
7. 土層の色調表記については，『新版標準土色帖』10 版（小山・竹原：1990.6，日本色研事業株式会社）に準拠し，土性区分は国際土壌学会法の基準を参考にした。
8. 本書の執筆は，河南町教育委員会社会教育課主査兼社会教育主事（現 河南町総務課主査）中野裕平，編集は社会教育主事　市川洋一及び中野が担当した。

目　　次

発刊の辞
例　　言
目　　次
Ⅰ．遺跡の位置と環境 …… 1
1. 遺跡の位置と地理的環境 …… 1
2. 遺跡の歴史的環境 …… 1
Ⅱ．調査経過 …… 7
1. 調査に至る経過 …… 7
2. 調査の方法と経過 …… 8
Ⅲ．基本層序 …… 10
Ⅳ．検出された遺構と出土遺物 …… 10
1. 竪穴住居跡 …… 10
2. 土壙 …… 18
3. 焼土遺構 …… 21
4. 不明遺構 …… 21
5. その他 …… 21
Ⅴ．考察とまとめ …… 22
引用・参考文献 …… 27
写　真　図　版 …… 29
報　告　書　抄　録 …… 43

Ⅰ．遺跡の位置と環境

1．遺跡の位置と地理的環境

細田遺跡は，宮城県桃生郡河南町須江字細田地内に所在し，ＪＲ石巻線佳景山（かけやま）駅の南方約1.5kmにある。遺跡の所在する河南町は面積69.33km²，人口約18，154人（平成14年8月31日現在）の町で，宮城県の東部に位置し，石巻市の北西，矢本町の北方に隣接する。旧北上川は町の北部で江合川に合流し，町の北部及び東部を区画しながら石巻湾に注いでいる。

東に標高60～90ｍの通称須江丘陵，西に箆岳丘陵からつづく標高70～170ｍの通称旭山丘陵，北に最高所173.9ｍの和渕山とこれに連なる丘陵を配している。町の中央部には低坦地があり，江戸時代には農業用水確保のため広渕沼が造られたが，大正10年から昭和３年にかけて干拓されて水田地帯となっている。

須江丘陵は，小竹地区を挟んで大きく南北に二分される。細田遺跡は，丘陵北部のほぼ中央の頂部及びその周辺斜面に立地しており，頂部の標高は50～70ｍである。現況は杉や雑木の山林である。

本遺跡の地層は，砂岩，黒色粘板岩，縞状頁岩，花崗岩質岩の礫からなる中新統：追戸層（佳景山礫岩部層）が基盤をなす。その上に礫岩，砂岩，シルト岩を主体とする鮮新統：亀岡層，その上に砂岩とシルト岩の互層と細粒凝灰岩，礫岩を主体とし，中程に僅かに褐灰～灰黄褐色の粘土質シルト岩を挟む鮮新統：表沢層がある。さらにその上には層の下部が粘土岩を挟んだ砂質シルト岩と砂岩の互層を主体として，層の上部では淡灰～灰色の陸成的な粘土質シルト岩が発達している鮮新統：俵庭層（仙台層群では大年寺層に対比させられる），その上に部分的に厚さ１ｍ前後の発達した斜層理などの段丘堆積物が見受けられる（滝沢・神戸ほか：1984.3)。

2．遺跡の歴史的環境

町内には，細田遺跡の所在する須江丘陵やその西に位置する旭山丘陵などの丘陵部を中心に，多数の遺跡が分布している。これらの遺跡について，時代別にふれてみたい。

縄文時代の遺跡は24箇所確認されている。この中で，型式名のわかる土器を出土しているのは12遺跡である。時期の古い遺跡から追っていくと，以下のようになる。

桑柄貝塚は，カキを主体とした鹹水産貝塚であり，前期（上川名Ⅱ式，大木１式）の遺物を包含する。

関ノ入遺跡では，前期（大木２式），中期（大木７ａ～８ｂ式），後期の遺物が出土している（中野：1988.3，中野・佐藤：1990.3，佐藤1993.3)。

朝日貝塚は，ヤマトシジミを主体とした汽水産貝塚であり，中期（大木７ｂ，８ａ，８ｂ式）の遺物を包含する（藤沼・小井川ほか：1989.3)。

小崎遺跡からは，中期（大木８，９式），後期，晩期の遺物が採集されている。

須江糠塚遺跡からは，中期（大木９式）の遺物が出土している（高橋・阿部：1987.3)。

宝ヶ峯遺跡は，縄文時代後期の土器型式「宝ヶ峯式」の標式遺跡として、学史的に有名である（伊東信雄：

1957.3，松本彦七郎：1919.5，1919.9，志間・桑月 1991.11)。中期，後期（南境式，宝ヶ峯式，金剛寺式），晩期（大洞Ｂ，ＢＣ，Ｃ１式）の土器，土偶，スタンプ状土製品，石器，石製品，骨角器など多数の遺物が出土している。また，遺跡の一部には，オオタニシなどからなる淡水産の貝塚がある。

前山Ｄ遺跡からは，中期（大木８式），後期（南境式，宝ヶ峯式，金剛寺式），晩期（大洞Ｃ１式）の土器，土偶，土製品，石器，石製品が出土している。特に，使用痕跡のない石器，石器製作時に派生するチップの出土が顕著で，ツールが少ない点も特徴である。また，多数のたたき石，未完成の石錘などもある。宝ヶ峯遺跡の南東約 250 ｍに位置し，年代的にも重複することから，同遺跡との関連が考えられる遺跡である。

代官山遺跡からは，後期（南境式）の遺物が出土している（佐藤：1993.3)。細田遺跡，俵庭遺跡，大沢Ａ遺跡からも後期（南境式）の遺物が採集されている。

前山Ｃ遺跡，太田沢遺跡からは，後期（南境式），晩期（大洞ＢＣ式）の遺物が出土している。両遺跡とも宝ヶ峯遺跡に近接しており，その関連が考えられる遺跡である。

外に前山Ａ遺跡・Ｂ遺跡，箱清水寺脇遺跡等があり，その多くは，旭山丘陵の麓部で平坦地に接する縁辺や沢をやや入ったところに広がる平坦部や緩斜面に立地する。また，宝ヶ峯遺跡を囲むように，放射状に位置している。しかし，その性格は，貝塚や発掘調査の実施された少数の遺跡を除いては不明である。

弥生時代の遺跡は２箇所確認されている。本鹿又遺跡では，旧北上川の川床から中期（大泉式）の遺物が採集されている。俵庭遺跡からは，土器は採集されていないが，アメリカ式石鏃が採集されている。

古墳時代の遺跡は８箇所確認されている。須江糠塚遺跡では，前期（塩釜式期第ⅡＢ段階）の竪穴住居跡が７軒検出されている。いずれも方形を基調としており，丘陵尾根上の平坦面に立地している（高橋・阿部：前掲）。

関ノ入遺跡からも，前期（塩釜式期第ⅡＢ～第Ⅲ段階）の竪穴住居跡が２軒検出されている。いずれも一辺が約３ｍ前後の方形を基調とした小型住居で，丘陵尾根上の平坦面に立地している（佐藤：前掲，ほか）。

前山Ａ遺跡からも，前期（塩釜式期第ⅡＢ～第Ⅲ段階）の竪穴住居跡が１軒検出されている。一辺が約6.5ｍ前後の方形を基調とした大型住居で，丘陵尾根上の平坦面に立地している。

新田Ａ遺跡でも前期（塩釜式第ⅡＢ段階）の土器が採集されている。鷺の巣遺跡からは，前期（塩釜式終末段階）から中期（南小泉式）にかけての土器が採集されている。後期の遺跡としては，代官山横穴墓群がある。外に，時期は不明であるが，高森山遺跡，群田遺跡がある。

奈良・平安時代の遺跡は 28 箇所確認されている。その大部分は丘陵上にある。細田遺跡では，９世紀代の竪穴住居跡などが検出された。この中に，ロクロピット・精製粘土・作業台と推定される石を伴うものがあり，工房跡と推定される。また，別地点の道路法面と，平成 10・11 年度の確認調査によって採石工事現場内（現状保存箇所）の斜面に９世紀代の窯跡とそれに伴うと推定される須恵器が発見された。また，平成 13 年度の調査区の西側斜面からは，９世紀代の須恵器・土師器，窯体の一部が採集されている。

須江丘陵では，丘陵の全域に窯跡が分布している。昭和 61 年度に調査した須江糠塚遺跡では，奈良時代後半から平安時代初期にかけての住居跡９軒，９世紀後半から 10 世紀前半にかけての窯跡６基を検出した（高橋・阿部：前掲）。

昭和 62 年度から平成６年度にかけて継続的に発掘調査が行われた関ノ入遺跡では，奈良時代と平安時代

No.	遺跡名	種別	時代	No.	遺跡名	種別	時代
1	須江糠塚遺跡（糠塚館跡）	集落跡 窯跡、城館	縄文（中）、古墳（前）、奈良、平安、中世	26	黒沢A遺跡	包含地	縄文、古代
2	須江瓦山窯跡	窯跡	奈良、平安	27	黒沢B遺跡	包含地	縄文、古代
3	池袋囲遺跡	包含地	古代	28	箱清水A遺跡	包含地	縄文（後）、古代
4	広渕沼遺跡	包含地		29	箱清水B遺跡	包含地	縄文、古代
5	宝ケ峯遺跡	包含地 貝塚	縄文（中～晩）、奈良、平安	30	箱清水寺脇遺跡	包含地	縄文
6	朝日貝塚	貝塚	縄文（中）	31	小友遺跡	包含地	古代
7	本鹿又遺跡	包含地	弥生	32	高森山遺跡	包含地	古墳、古代
8	桑柄貝塚	貝塚	縄文（前）	33	大沢A遺跡	包含地	縄文（後）、古代
9	塩野田城跡（塩煮田館跡）	城館	中世	34	大沢B遺跡	包含地	縄文
10	宿屋敷跡	城館	中世	35	大沢C遺跡	包含地	縄文、古代
11	要害館跡（館山館跡）	城館	中世	36	夷田館跡	城館	近世
12	武田館跡（武田屋敷跡）	城館	中世、近世	37	代官山遺跡	集落跡 窯跡	縄文（後）、奈良、平安
13	柏木館跡	城館		38	桑柄遺跡	包含地	古代
14	小崎館跡	城館	近世	39	新田A遺跡	包含地	古墳（前）、古代
15	草田館跡（草田遺跡）	城館 包含地	縄文、中世	40	新田B遺跡	包含地	古代
16	喜多村館跡（高地谷館跡）	城館	中世	41	代官山横穴墓群	横穴墓	古墳，古代
17	青木館跡（林光館跡）	城館	中世	42	群田遺跡	集落跡	縄文、古墳、奈良、平安、江戸
18	新城館跡（駒立館跡）	城館	中世	43	奈良山遺跡	窯跡	古代、江戸
19	駒場館跡	城館	中世	44	御塩蔵場跡	蔵跡	近世
20	俵庭遺跡	包含地	縄文（中・後）、弥生、古代	45	細田遺跡	窯跡 集落跡	縄文、奈良、平安
21	長者館跡（長者平遺跡）	城館 包含地	縄文、古代、中世	46	鷺の巣遺跡	包含地	古墳
22	関ノ入遺跡	集落跡 窯跡	旧石器、縄文(前～後)、古墳、奈良、平安、中世	47	前山B遺跡	包含地	縄文、古代
23	小崎遺跡	包含地	縄文（中～晩）、奈良、平安中世	48	前山C遺跡	集落跡	縄文（後・晩）、奈良、平安
24	太田沢遺跡	集落跡	縄文（晩）、古代	49	前山D遺跡	集落跡	縄文（中～晩）、奈良、平安
25	前山A遺跡	集落跡	縄文、古墳（前）、奈良、平安				

第1表　遺跡地名表

本書に記載の地図は、国土交通省国土地理院長の承認を得て、同院発行の1/25,000
地形図を複製したものです。　（承認番号　平14東複第317号）

前半の竪穴住居跡49軒(国分寺下層式期17軒，表杉ノ入式期23軒，不明9軒)，9世紀初頭から10世紀前半にかけての窯跡23基，9世紀代を主体とする粘土採掘坑跡48基，水簸坑と推定される土壙8基，10世紀半ば以降と推定される製鉄遺構3基などが検出されている(中野・佐藤：前掲，佐藤：前掲)。粘土採掘坑跡の多くは，前記俵庭層や表沢層の上に設けられていた。

須江瓦山窯跡には，奈良・平安時代の瓦や須恵器を生産した窯跡群がある。瓦の一部は，牡鹿郡衙あるいは牡鹿柵跡と推定される矢本町赤井遺跡に供給されている(三宅・進藤・茂木：1987.3)。平成3年度の発掘調査では土壙29基，焼土遺構1基が検出されている。土壙の中には，粘土採掘坑跡と推定されるもの11基，須恵器甕を横位に埋設したもの1基があった。

代官山遺跡では，8世紀後半と9世紀後半の窯跡が各1基ずつと，8世紀末から9世紀初頭にかけての竪穴住居跡1軒が検出されている(佐藤：前掲)。

長者館跡(長者平遺跡)では，一辺60m前後の方形区画を土塁状の遺構と溝状の遺構がめぐっている。溝状遺構は逆台形の断面形を呈し，上端幅約5～6m，下端幅約1m，最大深約1.8mの大規模な区画溝で，堆積土からは10世紀前半に降下した十和田a火山灰を検出した。近接した代官山遺跡より「佛」とヘラ書きされた土師器坏，関ノ入遺跡からは仏具を模倣したと考えられる土師器多口瓶・須恵器鉢が出土していることから，古代寺院と関連した遺構の存在が想定される(佐藤：前掲)。

旭山丘陵側に移ると群田遺跡では，8世紀末から9世紀前半にかけての竪穴住居跡1軒とそれにつづく9世紀代の竪穴住居跡2軒，竪穴遺構7基，骨片の入った須恵器甕を立位に埋設した土壙1基などが検出されている(中野：1993.3)。また，太田沢遺跡，前山C遺跡，前山D遺跡から表杉ノ入式の土師器が出土している。太田沢遺跡からは9世紀前半ころの竪穴住居跡1軒が検出されている。外に小崎遺跡，大沢C遺跡，俵庭遺跡などがある。

中世以降になると，旭山や須江の丘陵上など14箇所に城館が築造されている。長者館跡(長者平遺跡)は，金売吉次の仮屋敷跡(藩政期には小島嘉右ヱ門の除屋敷跡とも言われる)の伝承がある。糠塚城跡(須江糠塚遺跡)は，古代の中山柵跡にも擬定されたこともあり(清水東四郎：1924.12，鈴木省三：1924.12)，「仙台領内古城書上」によれば，東西20間，南北16間の規模で，館主は須藤勘解由左衛門と記されている(仙台叢書：1971)。小規模な平山城の形態で，空堀が一部残存している。塩野田城跡は東西21間，南北27間の規模で，城主は須藤勘解由左衛門(一説には矢代斎三郎)と伝えられている(「安永風土記」)。小規模な平山城の形態で，空堀や土塁状遺構が一部残存している。夷田館跡は，葛西氏家臣夷田氏の居館と伝えられている(「風土記御用書上」)。多くの城館跡は，年代，館主ともに不明である。

また，葛西氏の支配領域と推定される鹿又地区，須江地区を中心として，町内には，現在111基(鹿又59基，須江39基，北村9基，和渕3基，広渕1基)の板碑が確認されている。紀年名の判読できるものの中で最古は弘安元年(1278)，最新は文明10年(1478)のものである(佐藤雄一：1986.11)。残念ながら，多くの板碑は原位置を保っていない。これらの中には，ある特徴的な板碑もある。関ノ入遺跡出土の板碑は，木炭窯の焚口等を強化するために，板碑を折って燃焼部の側壁などに貼り付けたような状況で出土した(中野：1994.6)。また，北村字高寺にある高福寺からは5基の板碑が発見されたが，いずれも江戸時代元禄期前後の墓碑に転用されている。その中には，五輪塔に刻まれる「キャ・カ・ラ・バ・ア」を左右対称に刻んで五

輪塔を模した「五輪塔板碑」と呼ばれるものもある。発見地点の西側背後に小規模な平山城の形態を呈した新城館跡があること，板碑の中には「鎌倉権五郎五代」の文字が見受けられること，江戸時代以前に新城館跡から群田遺跡の両脇を通過して小野（鳴瀬町）に通じる道があったとされることから，深谷荘の領主である長江氏に関連した中世的世界が想定される。以上，町内に現存する板碑は，ほぼ全て粘板岩製である。

江戸時代以降，新田開発，旧北上川や江合川の改修工事が行われ，舟運が盛んになる。平成２年度と10・11年度に調査された御塩蔵場跡では，基壇状遺構（上面：約400㎡）が検出されている（佐藤：1991.3，中野：2000.11）。御塩蔵場は，桃生・牡鹿・本吉・気仙の四郡から運送された塩を納庫したとされる施設である（「風土記御用書上」）。群田遺跡からは，主に18・19世紀代の生活用品などが出土して井戸跡や建物を区画するような溝があることから屋敷跡と考えられる整地面１箇所，墓壙１基が検出されている（中野：前掲）。外に，東浜街道や涌谷街道，そしてこれらの街道に伴う一里塚跡，瓦や陶器を生産したと考えられる奈良山遺跡，須江瓦山窯跡，仙台藩の財政建て直しの一環として寛文年間に完成した深谷地方の新田開発に係る用水確保のための広渕沼（大溜池・大堤），そこに水を引くための継入堀，松ヶ窪，長岩堰，新継入堀の潜穴跡，広渕沼から鹿又村へ農業用水を引くための糠塚潜穴跡などがある。

Ⅱ．調査経過

1．調査に至る経過

細田遺跡の所在する宮城県桃生郡河南町須江は，石巻市に隣接する地域であることからスプロール化が進み，これまでに大小多くの開発が行われてきた場所である。それは，河南町による工業団地用地造成工事，河南町関ノ入土地区画整理組合による住宅団地用地造成工事，齋藤建設株式会社による土砂採取工事，各電信会社による無線中継所設置工事，個人住宅の建設，石巻地方広域水道企業団による須江山浄水場建設工事，そして丸興産業株式会社（以下「丸興産業」）による細田採石工事などである。

細田採石工事は，丸興産業による宮城県桃生郡河南町須江字細田89・90・91番地内における採石事業である。丸興産業は，昭和47年７月から鹿又字欠山地内で採石事業を行ってきた。平成３年12月，河南町教育委員会（以下「教育委員会」）は，石巻文化センター中村光一氏（当時）より須江字細田の共同葬祭場北側の沢で土器を発見した旨の連絡を受け，直ちに現地を確認した。遺跡であることを確認した教育委員会は，隣接地で採石工事を行っていた丸興産業に今後採石工事を計画している地域の一部に遺跡があることを通知した。

平成７年10月，採石法第33条の採取計画に係わる協議の中で，３年目以降の採取予定区域の一部が細田遺跡にかかるため，教育委員会は，丸興産業にこの旨を通知した。

平成８年９月，採石工事区域が遺跡に接近したため，教育委員会と丸興産業は現地立会の上，遺跡と考えられる範囲を確認した。その上で，遺跡部分については協議文書の提出を求めた。

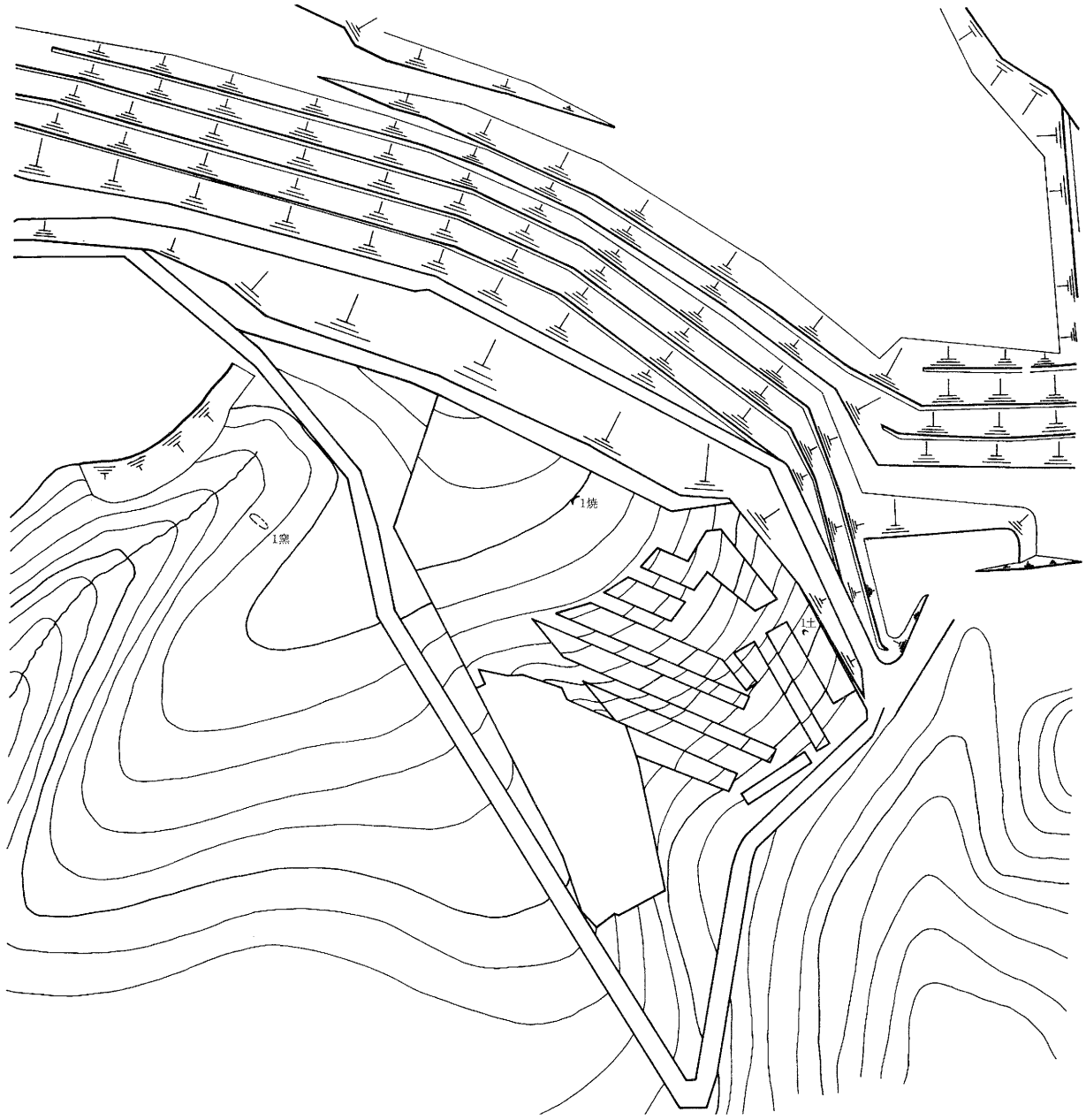
平成９年２月，丸興産業は教育委員会に協議文書を提出し，同９年３月，県文化財保護課を加えた三者で取扱いの協議に入った。

2. 調査の方法と経過

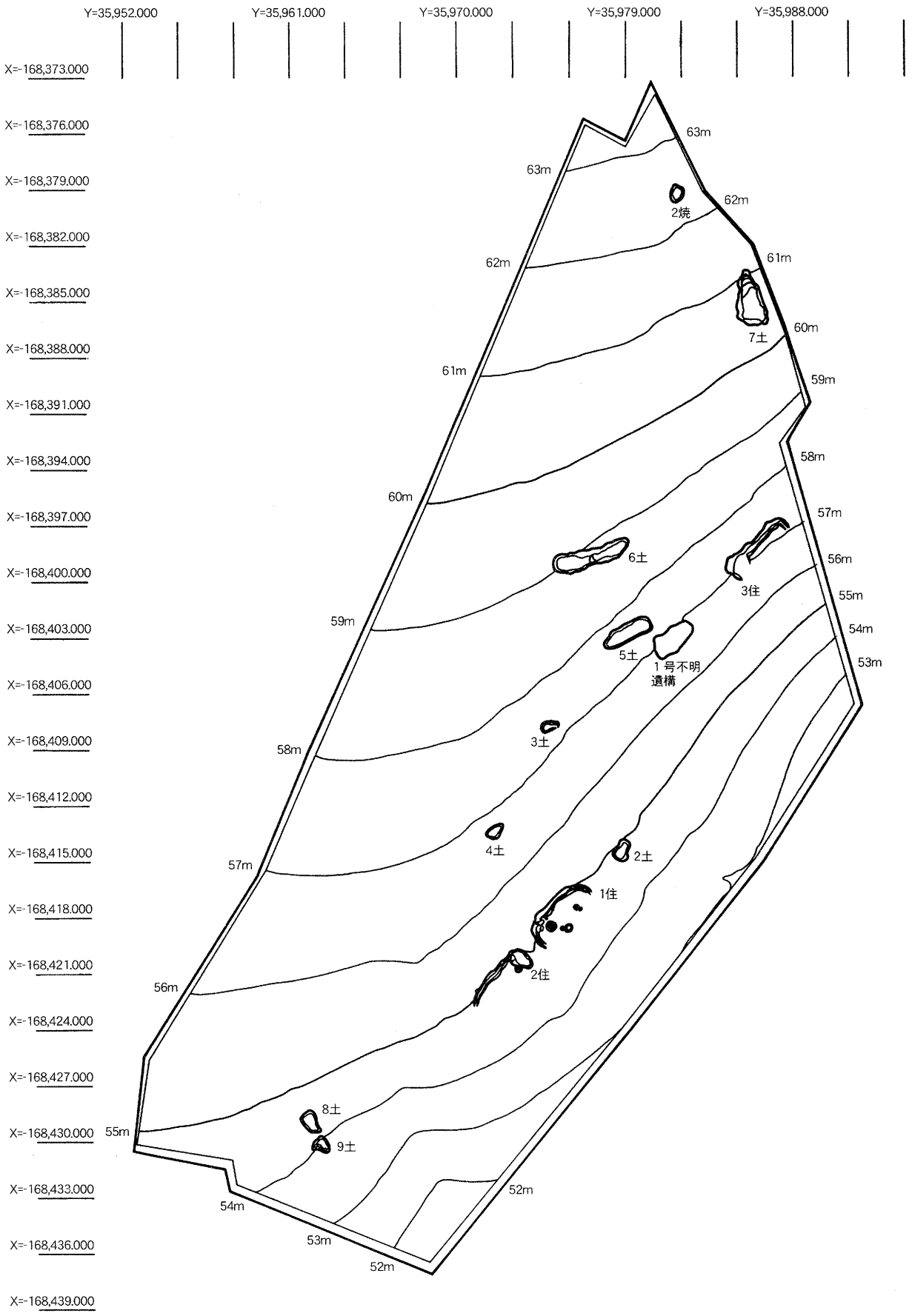
今回の発掘調査は，丸興産業による採石工事予定地の一部が『宮城県遺跡地図』(宮城県教育委員会:1993.3)登載の周知の埋蔵文化財包蔵地である細田遺跡の範囲内に所在するため，遺跡の立地する丘陵斜面を対象として実施したものである。

確認調査は，平成９年８月28日～同年９月４日，平成10年11月4日～同年11月6日，平成11年10月19日～同年10月22日の3回実施し，丘陵の地形に則って３～６m幅のトレンチを２～６mの間隔をもって設定し，あるいは遺構集中地点は全面的に，重機によって表土除去を行い，遺構を確認した。

これによって，調査区内の遺構の分布が把握され，遺構集中箇所と点在箇所が確認された。また，グリ



第２図　細田遺跡調査区



第３図　平成 13 年度調査区遺構配置図

ットの設定，表記については，国家座標のＸ軸，Ｙ軸に基づいて原点を設置して表記した。

また，遺構のない部分については，確認調査後に丸興産業に引き渡した。

事前調査は，遺構集中箇所を中心に，ほぼ全面について行った。効率的に調査を進めるため，重機を用いて表土を除去し，人力による精査の上，遺構を確認した。その結果，竪穴住居跡３軒，土壙９基，焼土遺構２基，不明遺構１基を検出した。（土壙・焼土遺構各１基ずつについては平成 10 年度確認調査時に検出）。

検出した遺構の実測図は，全て 1/20 図で作成した。

発掘調査は，平成 13 年 10 月 15 日に開始し，同年 12 月７日までに遺構の平面図・断面図，写真，調査区の全景写真及び文章記録等の記録化を全て完了し，調査を終了した。

Ⅲ. 基本層序

今回の調査区は，丘陵斜面からなる。斜面は，上部に多少の緩斜面があるものの，外はほぼ同一の傾斜を呈する。

〔Ⅰ層〕にぶい黄褐（10 ＹＲ 4/3 ～ 10 ＹＲ 5/4）色のシルトである。本遺跡の表土で，調査区全域に分布する。粘性はなく，しまりに欠ける。層厚は，10 ～ 30 ㎝である。現況は杉や雑木の山林である。少量の土師器・須恵器を含む。

〔Ⅱ層〕暗褐（10 ＹＲ 3/3 ～ 10 ＹＲ 3/4）色，または黒褐（10 ＹＲ 2/2 ～ 10 ＹＲ 2/3）色のシルトである。調査区南側の標高約 60 m以下に分布する。やや粘性があり，しまりに欠ける。層厚は５～ 60 ㎝である。

〔Ⅲ層〕褐（10 ＹＲ 4/4）色のシルトである。調査区全域に分布する。やや粘性があり，しまりに欠ける。層厚は，10 ～ 25 ㎝である。少量の土師器，須恵器，縄文土器を含む。

〔Ⅳ層〕黄褐（10 ＹＲ 5/6）色の粘土質シルトである。本調査区の地山で，調査区全域に分布する。今回検出された全ての遺構は，本層上面で確認されている。

Ⅳ. 検出された遺構

今回の調査では，竪穴住居跡３軒，土壙９基，焼土遺構２基，不明遺構１基が検出された。これらの遺構に伴って，土師器・須恵器等の遺物が出土した。

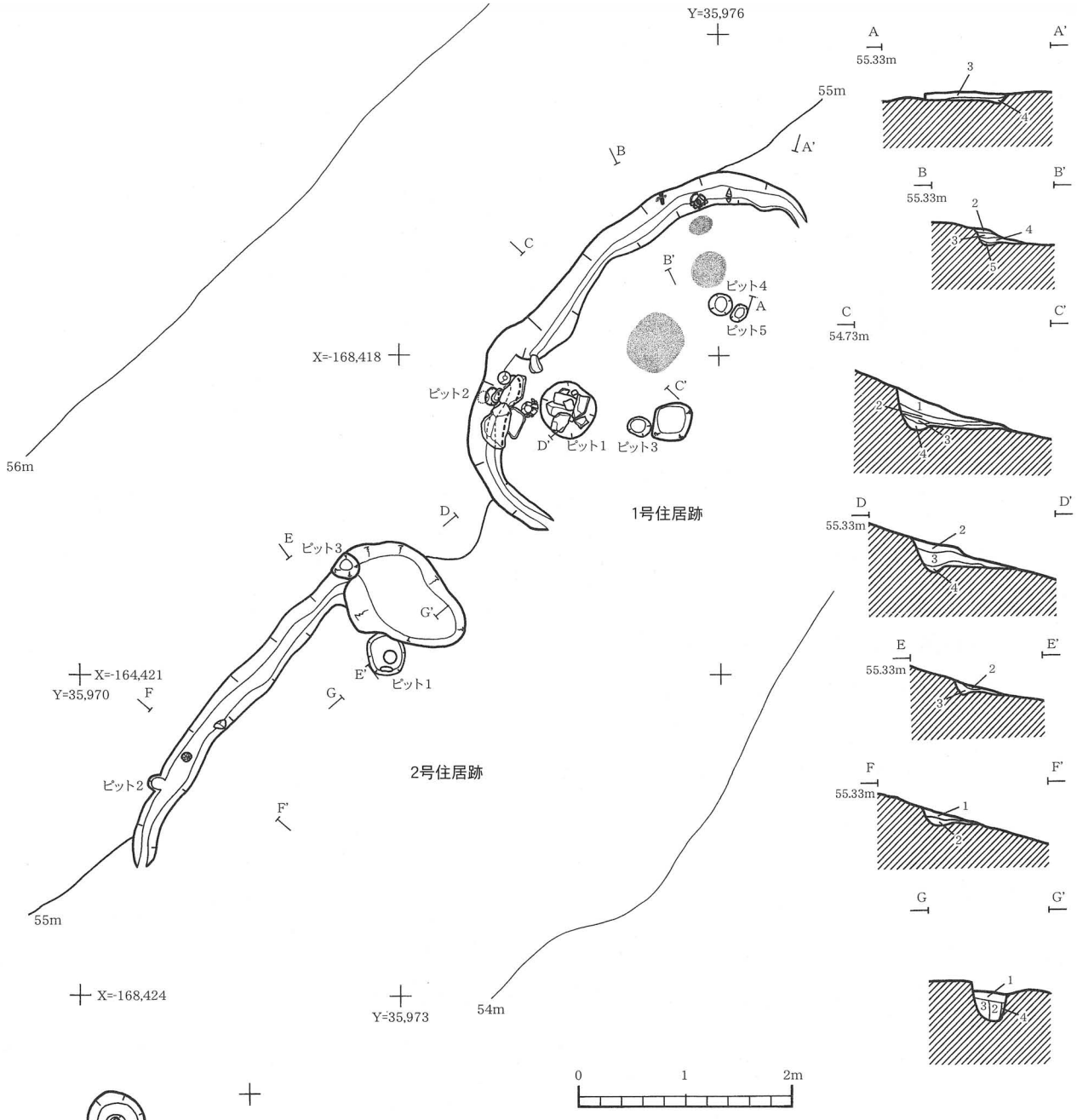
1. 住居跡

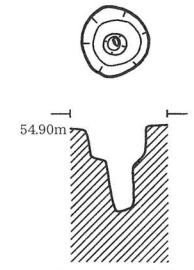
（１）１号住居跡

〔確認面〕基本層序Ⅳ層から確認された。

〔重複・増改築〕認められない。

〔規模・平面形〕北西壁の全部と北東壁・南西壁の一部が検出された。残存する各壁の幅は，北西壁 3.57 m，北東壁 0. 93 m，南西壁 0.97 mである。一辺が 3.5 m前後の正方形または長方形と推定される。





（1号住居跡P1完掘状況）

第４図　１・２号住居跡

No.	土色	土性	備考	堆積範囲
1	褐 10 YR 4/4	シルト	多量の灰白色火山灰を粒～塊状，炭化物・地山土を粒状に含。地山礫を含。	竪穴１層
2	暗褐 10 YR 3/3	粘土質シルト	少量の炭化物・焼土を粒状に含。地山礫を含。	竪穴２層
3	暗褐 10 YR 3/3	シルト	少量の炭化物・焼土を粒状に含。地山礫を含。	竪穴２層
4	黒褐 10 YR 2/	シルト	多量の灰黄 2.5 Y 7/2 粘土を塊状，少量の炭化物を粒～塊状，焼土・地山土を粒状に含。	竪穴３層
5	にぶい黄褐 10 YR 4/3	粘土質シルト	少量の地山土を粒状に含。	竪穴３層

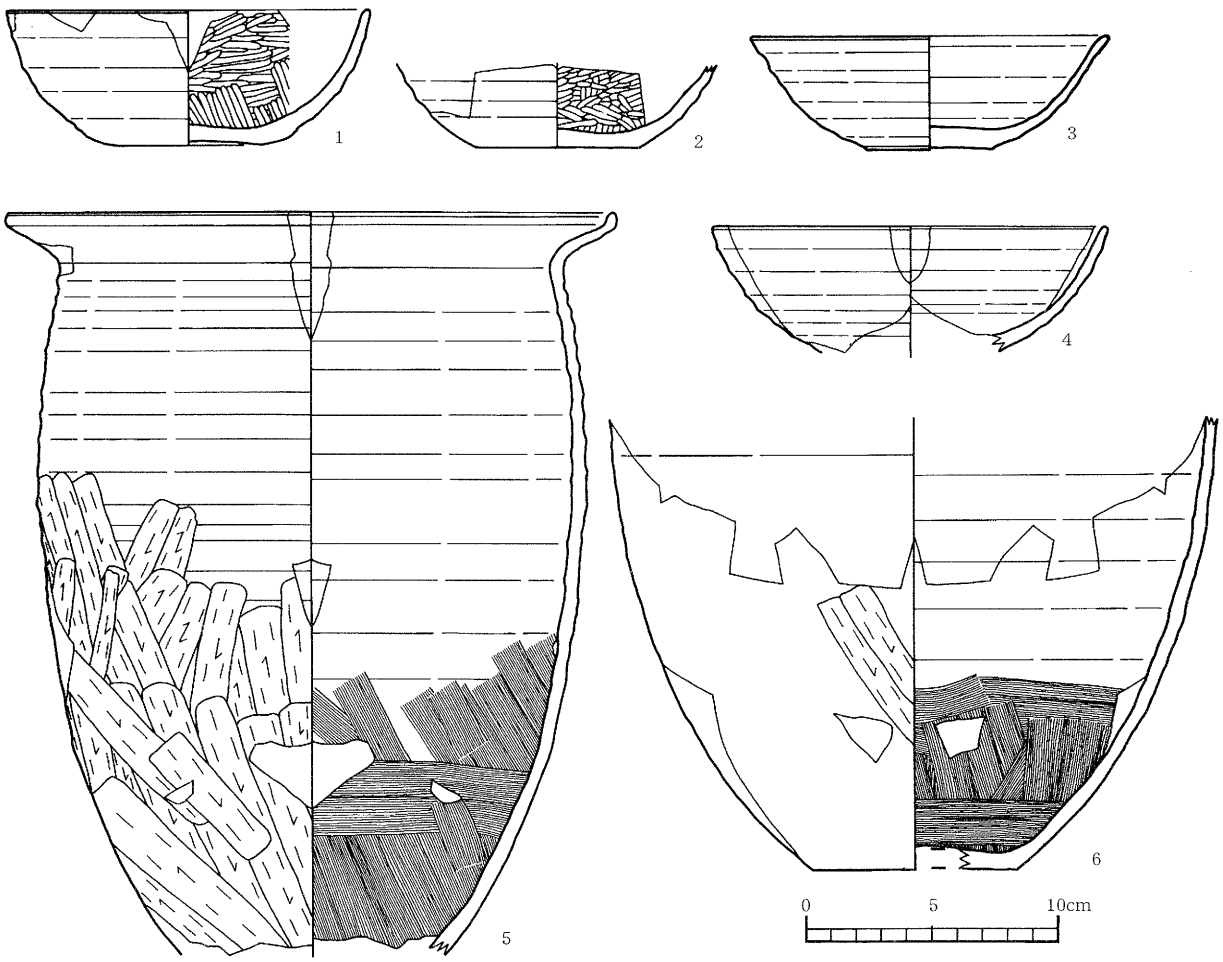
第２表　１号住居跡土層註記表

No.	土色	土性	備考
1	にぶい黄褐 10 YR 5/4	シルト	少量の炭化物・地山土を粒状に含。
2	暗褐 10 YR 3/3	シルト	少量の炭化物を粒状，地山土を粒～塊状に含。
3	褐 10 YR 4/4	シルト	少量の炭化物を粒状に含。
4	暗褐 10 YR 3/3	粘土質シルト	少量の炭化物・地山土を粒～塊状に含。炭化物の量は上記３層より多い。
5	褐 10 YR 4/4	シルト	少量の炭化物を粒～塊状に含。

第３表　１号住居跡Ｐ１（ロクロピット）土層註記表

No.	土色	土性	備考
1	灰白 10 YR 8/2	粘土	精製粘土
2（掘り方）	褐 10 YR 4/4	シルト	少量の炭化物を粒～塊状，地山土を塊状に含。

第４表　１号住居跡Ｐ２土層註記表



第５図　１号住居跡出土遺物（１）

No.	種別	層位	外面	底部	内面	口径・底径・器高(cm)	備考
1	土師器坏	床面	ロクロナデ	回転糸切り	ヘラミガキ，黒色処理	14.5・5.9・5.4	図版７－２
2	土師器坏	床面直上	ロクロナデ	回転糸切り	ヘラミガキ，黒色処理	―・6.4・―	
3	須恵器坏	周溝（一括遺物）	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ	14.3・4.5・5.1	図版７－１
4	須恵器坏	確認面	ロクロナデ	―	ロクロナデ	15.6・―・―	
5	土師器甕	底面Ｐ１（ロクロピット）	ロクロナデ，ヘラ削り	―	ロクロナデ，ナデ	24.0・―・―	図版７－４
6	土師器甕	堆積土中～底面Ｐ１（ロクロピット）	ロクロナデ，ヘラ削り，マメツ	削り	ロクロナデ，ナデ	―・8.0・―	図版７－３

第５表　１号住居跡出土遺物観察表（１）

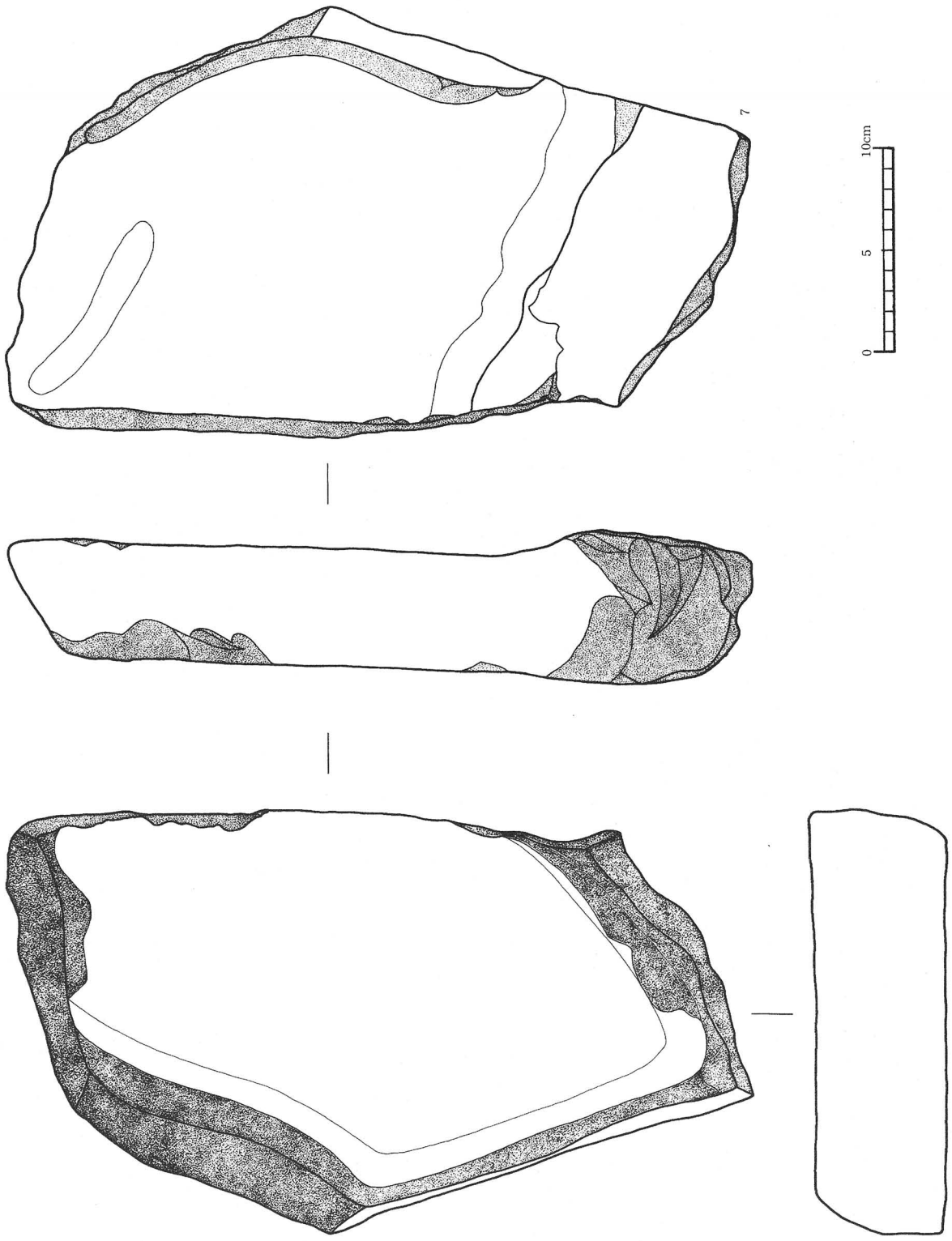
〔竪穴層位〕竪穴層位は３層に大別され，いずれも自然堆積層である。この中で，層 No.1 は灰白色火山灰を含む。

〔壁〕基本層序Ⅳ層からなり，最も保存の良い北西壁では 35 cmの高さで残存している。床面から急な角度で立ち上がる。

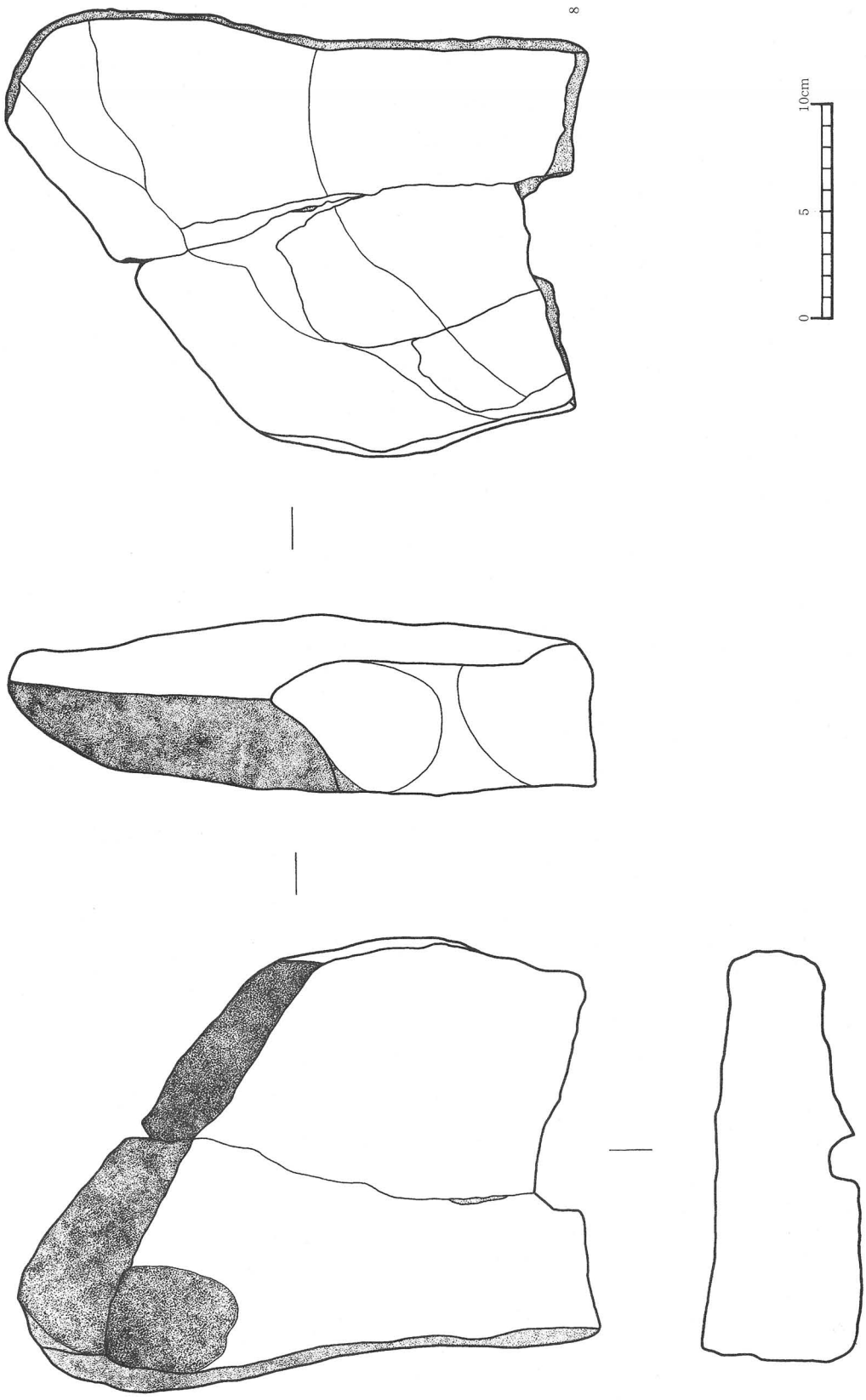
〔床面〕基本層序Ⅳ層を床面としており，凹凸はない。床面レベルは北東側が最も高く，南側になるにつれて徐々に低くなる。全体的にややかたい。床面南半を中心に強い火熱の痕跡が認められた。比較的急な斜面に立地しており，南半部が自然の削平を受けていた。

〔柱穴〕５個のピットが検出された。ピット３・５は柱穴と考えられる。ピット２は壁柱穴と考えられる。ピット４は柱穴ではない。他に北西壁の北側に棒状の炭化物が確認され，壁柱穴と推定される。ピット１はロクロピットである。

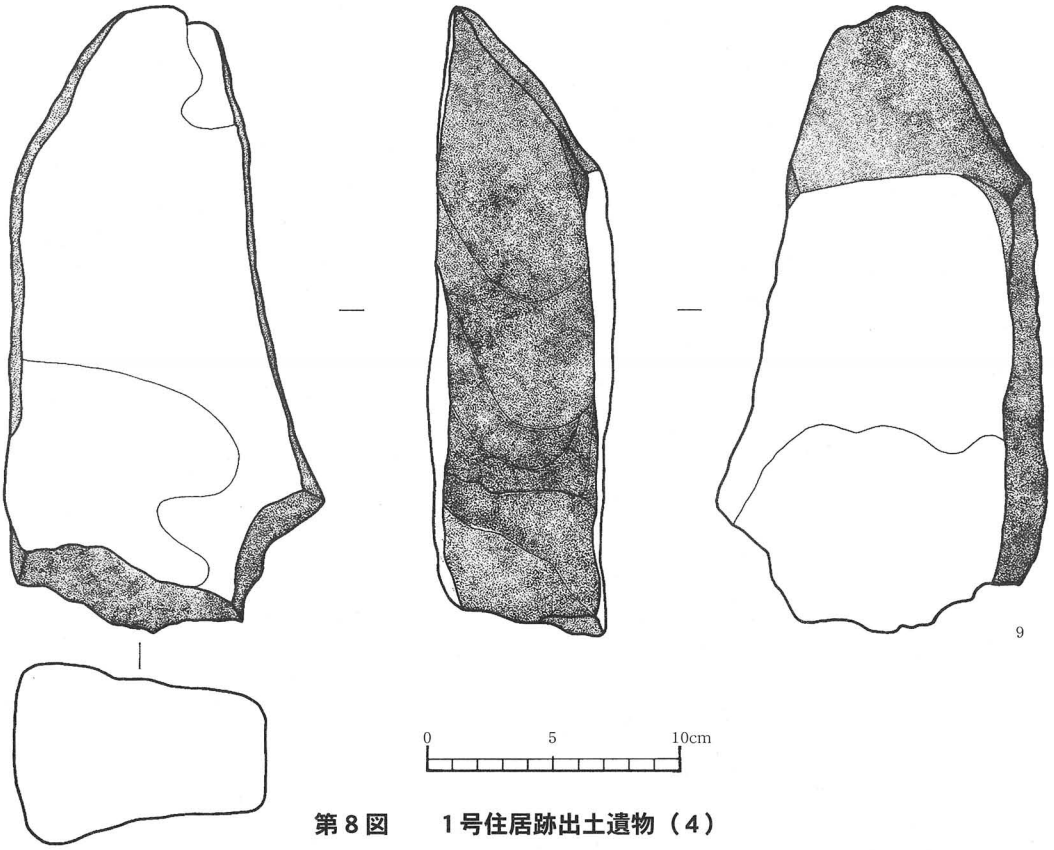
〔カマド〕検出されなかった。



第6図　1号住居跡出土遺物（2）



第７図　１号住居跡出土遺物（３）



第８図　　１号住居跡出土遺物（４）

No.	種別	層位	残存長・幅・厚(cm)	備 考
7	台石	床面	36.5・20.7・5.7	図版７－５
8	台石？	ロクロピット堆積土中	27.3・19.1・8.0	
9	台石？	ロクロピット堆積土中	25.0・12.8・7.1	

第６表　　１号住居跡出土遺物観察表（１）

〔貯蔵穴状ピット〕検出されなかった。

〔周溝〕壁と同様に全部は検出されなかったが，壁沿いに存在したものと推定される。幅 14 ～ 30 ㎝，深さ３～７㎝，断面は「U」形である。底面レベルは北隅が最も高く，南東側に向かうにつれて徐々に低くなる。

〔出土遺物〕床面，周溝，ロクロピットを中心に，土器の一括資料が出土した。

（２）２号住居跡

〔確認面〕基本層序Ⅳ層から確認された。

〔重複・増改築〕柱穴の一部が撹乱穴によって切られていた。

〔規模・平面形〕北西壁と北東壁の一部が検出された。残存する各壁の幅は，北西壁 3.78 m，北東壁 1.08 mである。一辺が３m前後の正方形または長方形と推定される。

〔竪穴層位〕竪穴層位は２層に大別され，いずれも自然堆積層である。この中で，層№1 は灰白色火山灰を含む。

〔壁〕基本層序Ⅳ層からなり，最も保存の良い北西壁では 21cm の高さで残存している。

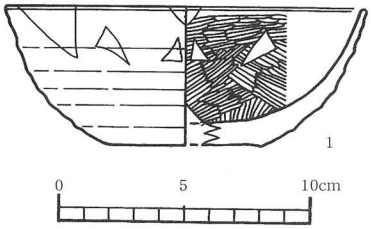
〔床面〕基本層序Ⅳ層を床面としており，凹凸はない。床面レベルは北側が高く，南東側になるにつれて徐々に低くなる。全体的にややかたい。比較的急な斜面に立地しており，南東側が自然の削平を受けていた。

No	土色	土性	備考	堆積範囲
1	褐 10 YR 4/4	粘土質シルト	多量の灰白色火山灰を粒～塊状に含。少量の炭化物を粒状に含。	竪穴１層
2	にぶい黄褐 10 YR 4/3	シルト	少量の灰白色火山灰を粒～塊状，炭化物・焼土・地山土を粒状に含。地山礫を含。	竪穴２層
3	褐 10 YR 4/4	シルト	少量の炭化物・焼土・地山土を粒状に含。地山礫を含。	竪穴３層

第７表　２号住居跡土層註記表

No.	種別	層位	外面	底部	内面	口径・底径・器高(cm)	備 考
1	土師器坏	床面	ロクロナデ	回転糸切り	ヘラミガキ，黒色処理	14.3・ 6.0・5.5	図版８－２

第８表　　２号住居跡出土遺物観察表



第９図　　２号住居跡出土遺物

〔柱穴〕３個のピットが確認された。ピット１は柱穴，ピット２は壁柱穴と考えられる。ピット３は柱穴ではない。

〔カマド〕検出されなかった。

〔貯蔵穴状ピット〕検出されなかった。

No.	土色	土性	備考
1	黒褐 2.5 Y 3/1	シルト	少量の炭化物を粒～塊状，地山土を粒状に含。地山礫含。
2	暗オリーブ褐 2.5 Y 3/3	シルト	少量の炭化物を粒～塊状に含。
3	褐 10 YR 4/4	シルト	多量の地山土を粒～塊状に含。固くよくしまっている。

第９表　２号住居跡Ｐ１土層註記表

〔周溝〕壁と同様に全部は検出されなかったが，壁沿いに存在したものと推定される。幅 22 ～ 35cm，深さ１～６ cm，断面は「Ｕ」形である。底面レベルは北隅が最も高く，南側に向かうにつれて徐々に低くなる。

〔出土遺物〕床面，周溝を中心に，土器の一括資料が出土した。

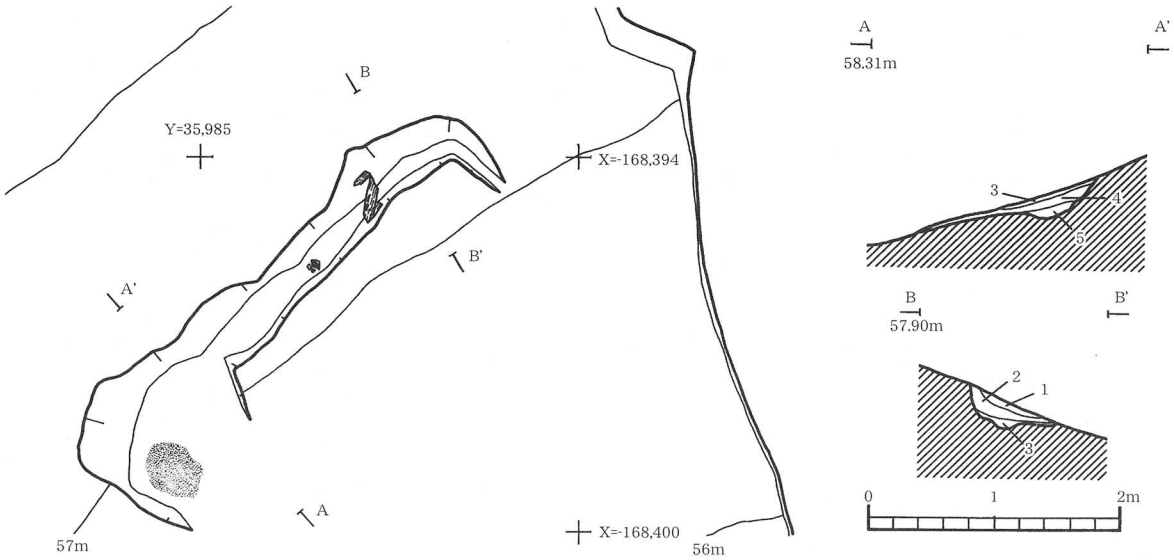
（３）３号住居跡

〔確認面〕基本層序Ⅳ層から確認された。

〔重複・増改築〕認められない。

〔規模・平面形〕北西壁の全部と北東壁・南西壁の一部が検出された。残存する各壁の幅は，北西壁 4.01 m，北東壁 0.73 m，南西壁 1.06 mである。一辺が４m前後の正方形または長方形と推定される。

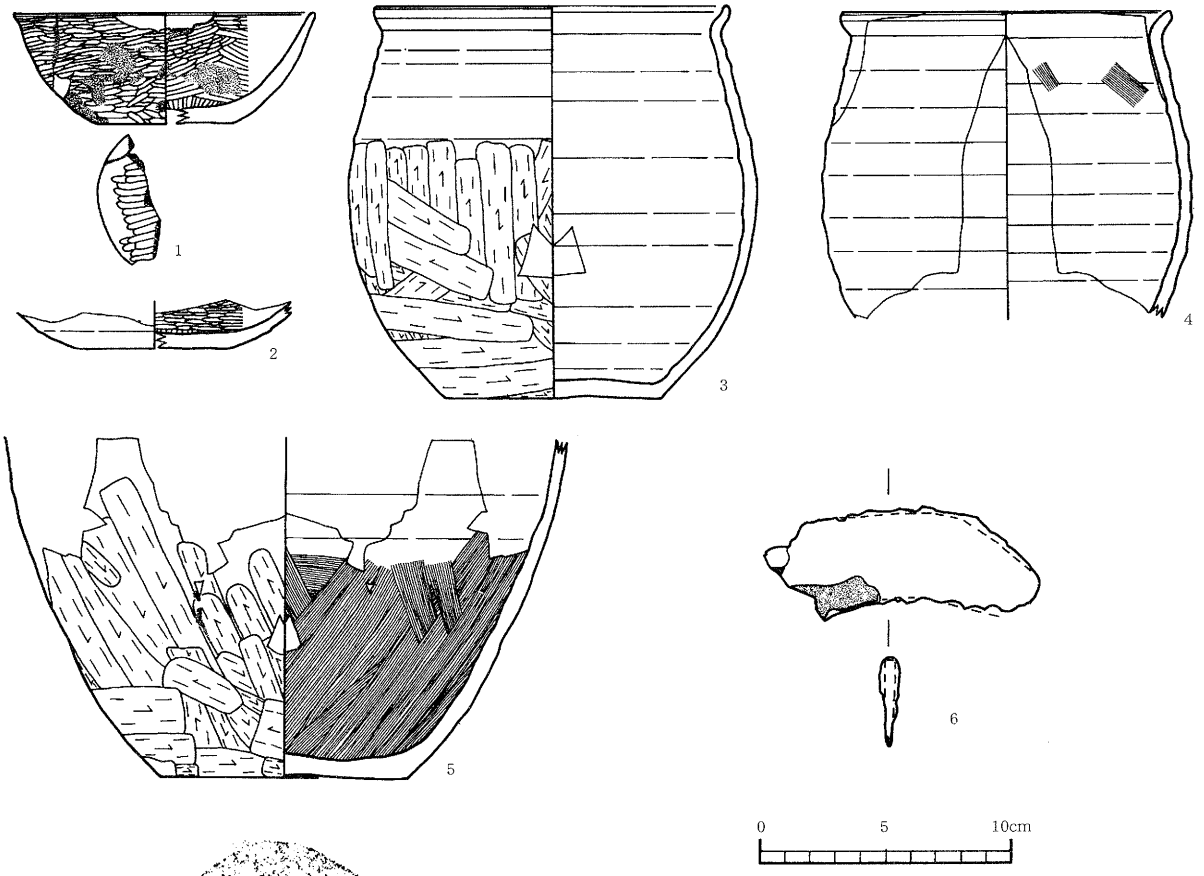
〔竪穴層位〕竪穴層位は３層に大別され，いずれも自然堆積層である。この中で，層 No.1 は灰白色火山灰を含む。



第 10 図　３号住居跡

No.	土色	土性	備考	堆積範囲
1	暗褐 10 YR 3/4	粘土質シルト	多量の灰白色火山灰を粒～塊状，少量の炭化物を粒状に含。	竪穴１層
2	褐 10 YR 4/4	シルト	少量の炭化物・地山土を粒～塊状に含。	竪穴２層
3	にぶい黄褐 10 YR 4/3	粘土質シルト	少量の炭化物・地山土を粒状に含。地山礫を含。	竪穴３層
4	褐 10 YR 4/4	シルト	少量の炭化物を粒状に含。地山礫を含。	
5	暗褐 10 YR 3/4	粘土質シルト	少量の炭化物を粒～塊状，焼土・地山土を粒状に含。	

第 10 表　３号住居跡土層註記表



第 11 図　3 号住居跡出土遺物

NO.	種別	層位	外面	底部	内面	口径・底径・器高(cm)	備考
1	土師器坏	床面	ヘラミガキ，黒色処理	ヘラミガキ，黒色処理	ヘラミガキ，黒色処理	12.0・5.4・4.4	図版 10－1
2	土師器坏	周溝	ロクロナデ	回転糸切り	ヘラミガキ，黒色処理	—・6.0・—	
3	土師器甕	2 層(一括遺物)	ロクロナデ，ヘラ削り	削り	ロクロナデ	14.1・8.5・15.6	図版 10－3
4	土師器甕	2 層(一括遺物)	ロクロナデ	—	ロクロナデ，ナデ	13.0・—・—	図版 10－2
5	土師器甕	1 層(一括遺物)	ロクロナデ，ヘラ削り	削り	ロクロナデ，ナデ	—・9.8・—	図版 10－4
6	金属製品	1 層	残存長：11.0cm　幅：3.3cm　厚：0.5cm				

第 11 表 3 号住居跡出土遺物観察表

〔壁〕基本層序Ⅳ層からなり，最も保存の良い北西壁では 33cm の高さで残存している。床面から急な角度で立ち上がる。

〔床面〕基本層序Ⅳ層を床面とする。西隅に強い火熱の痕跡が認められた。比較的急な斜面に立地しており，標高 57 m以上の僅かな部分のみ残存している。

〔柱穴〕検出されなかった。

〔カマド〕検出されなかった。土器の一括資料が出土したことや位置的に西隅の強い火熱の痕跡がカマドとも考えられるが，確証はない。

〔貯蔵穴状ピット〕検出されなかった。

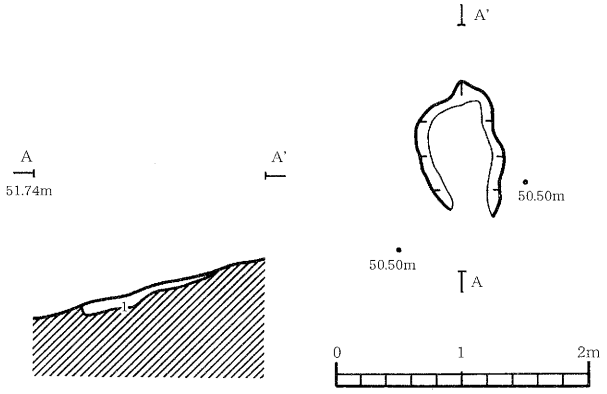
〔周溝〕壁と同様に全部は検出されなかったが，壁沿いに存在したものと推定される。幅 12 ～ 37cm，深さ 4 ～ 8 cm，断面は「Ｕ」形である。底面レベルは北西壁の北隅付近が最も高く，南東側に向かうにつれて徐々に低くなる。

〔出土遺物〕周溝，強い火熱の痕跡付近を中心に，土器の一括資料が出土した。

2. 土壙

（1）1号土壙

調査区南東部斜面の基本層序Ⅲ層から確認された。重複は認められない。長軸 1.04 m，短軸 0.68 m，深さ 0.24 mの規模で，平面形は不整方形を呈する。底面はやや凹凸があり，壁は急に立ち上がる。堆積土は単層で，自然堆積層である。



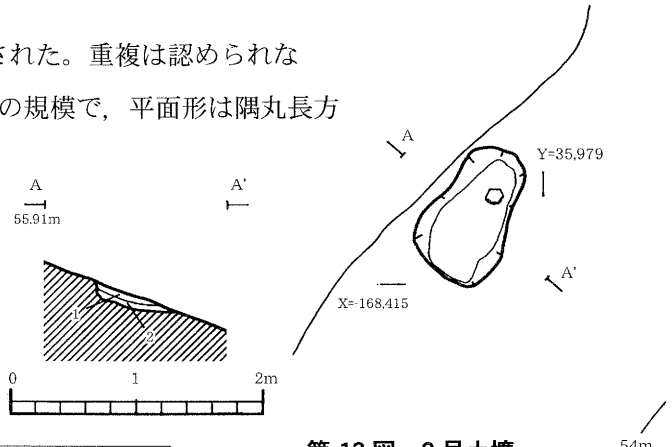
第 12 図　1号土壙

土色	土性	備考	大別
にぶい黄褐 10 YR 4/3	シルト	少量の炭化物を粒状，焼土を粒～塊状，地山土を塊状に含。細砂含。	自然堆積層

第 12 表　1号土壙土層註記表

（2）2号土壙

調査区南西部斜面の基本層序Ⅳ層から確認された。重複は認められない。長軸 1.11 m，短軸 0.57 m，深さ 0.32 mの規模で，平面形は隅丸長方形を呈する。底面は平坦で，壁は急に立ち上がる。壁面の一部に崩落の痕跡が確認された。堆積土は 2 層に細分され，いずれも自然堆積層である。この中で，層 No.1 は灰白色火山灰を含んでいる。遺物は，土師器の破片が出土した。



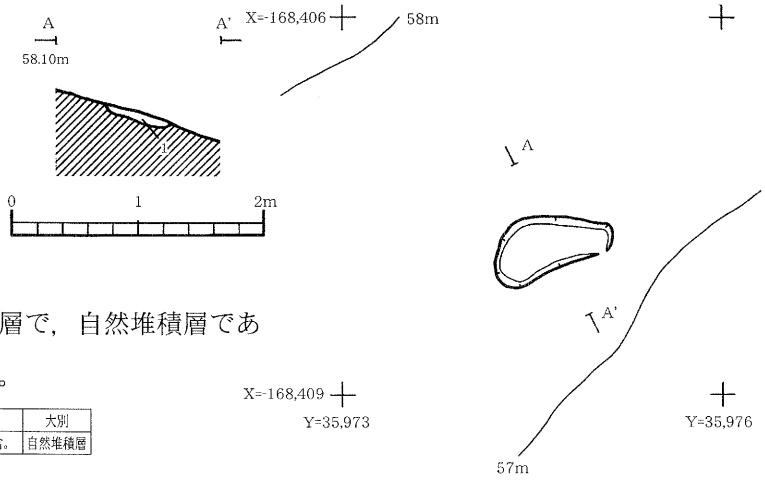
第 13 図　2号土壙

NO.	土色	土性	備考	大別
1	にぶい黄褐 10 YR 4/3	粘土質シルト	多量の灰白色火山灰を粒～塊状，少量の炭化物を粒状に含。地山礫を含。	自然堆積層
2	褐 7.5 YR 4/3	シルト	少量の炭化物を粒状に含。地山礫を含。	

第 13 表　2号土壙土層註記表

（3）3号土壙

調査区南西部斜面の基本層序Ⅳ層から確認された。重複は認められない。長軸 0.96 m，短軸 0.47 m，深さ 0.18 mの規模で，平面形は不整方形を呈する。底面はほぼ平坦で，壁は急に立ち上がる。堆積土は単層で，自然堆積層である。遺物は，土師器の破片が出土した。



第 14 図　3号土壙

No.	土色	土性	備考	大別
1	にぶい黄褐 10 YR 5/3	シルト	少量の炭化物を粒状，地山土を粒～塊状に含。	自然堆積層

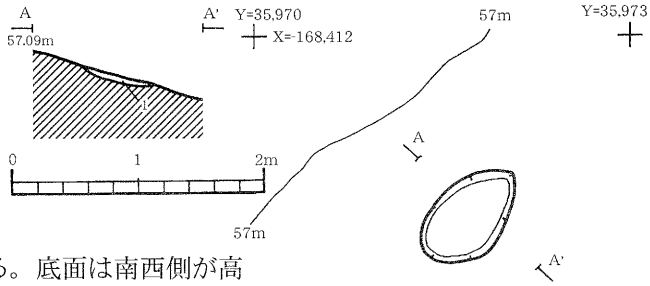
第 14 表　3号土壙土層註記表

（4）4号土壙

調査区南西部斜面の基本層序Ⅳ層から確認された。重複は認められない。長軸 0.93 m，短軸 0.57 m，深さ 0.17 mの規模で，平面形は楕円形を呈する。底面はほぼ平坦で，壁は急に立ち上がる。堆積土は単層で，自然堆積層である。遺物は，土師器の破片が出土した。

No.	土色	土性	備考	大別
1	にぶい黄褐 10 YR 5/4	シルト	少量の炭化物を粒状，地山土を粒～塊状に含。	自然堆積層

第 15 表　4 号土壙土層註記表



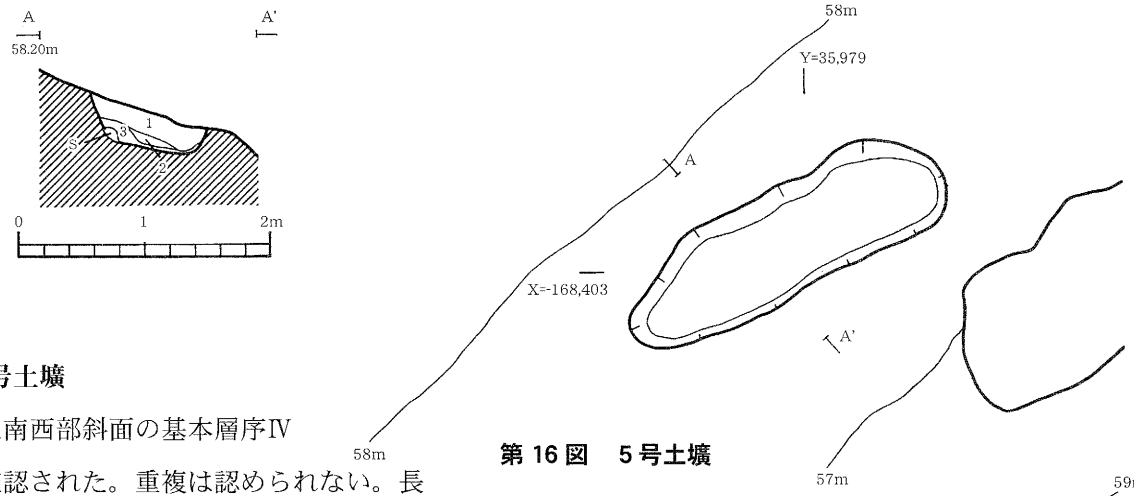
第 15 図　4 号土壙

（5）5 号土壙

調査区南西部斜面の基本層序Ⅳ層から確認された。重複は認められない。長軸 2.75 m，短軸 0.84 m，深さ 0.50 mの規模で，平面形は不整方形を呈する。底面は南西側が高く北東側に向かうにつれて徐々に低くなるが，全体としてはほぼ平坦である。壁は急に立ち上がる。堆積土は 3 層に細分され，いずれも自然堆積層である。

No.	土色	土性	備考	大別
1	にぶい黄褐 10 YR 4/3	シルト	少量の炭化物を粒状に含。地山礫を含。	自然堆積層
2	にぶい黄褐 10 YR 5/4	シルト	少量の炭化物を粒状，地山土を粒～塊状に含。地山礫を含。	
3	黄褐 10 YR 5/6	粘土質シルト	少量のにぶい黄褐 10 YR 5/4 シルトを粒～塊状，炭化物を粒状に含。	

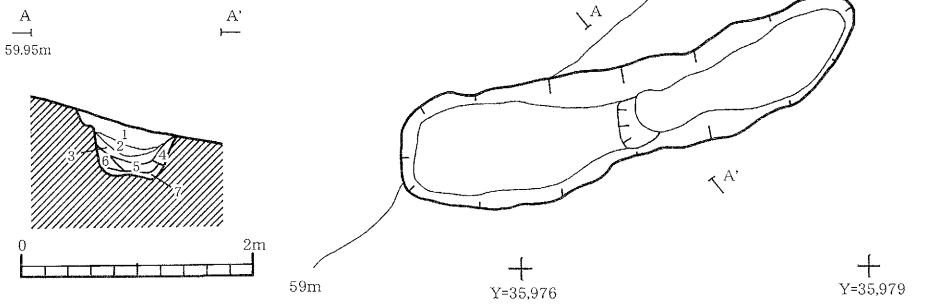
第 16 表　5 号土壙土層註記表



第 16 図　5 号土壙

（6）6 号土壙

調査区南西部斜面の基本層序Ⅳ層から確認された。重複は認められない。長軸 4.12 m，短軸 1.04 m，深さ 0.71 mの規模で，平面形は不整方形を呈する。底面は二段に分かれ，西側が高く東側が低い。いずれもほぼ平坦である。壁は急に立ち上がる。堆積土は 7 層に細分され，層 No.1・2・5 は自然堆積層，層 No.3・7 は人為的埋土，層 No.4・6 は壁崩落土である。



第 17 図　6 号土壙

No.	土色	土性	備考	大別
1	褐 10 YR 4/4	シルト	少量の炭化物を粒状，地山土を粒～塊状に含。地山礫を含。	自然堆積土
2	にぶい黄褐 10 YR 4/3	シルト	少量の地山土を粒～塊状に含。地山礫を含。	
3	黄褐 10 YR 5/6	シルト質粘土	多量のにぶい黄褐 10 YR 4/3 シルトを粒～塊状に含。地山礫を含。	人為的埋土
4	黄褐 10 YR 5/8	シルト質粘土	少量の炭化物を粒状に含。地山礫を含。	壁崩落土
5	にぶい黄褐 10 YR 5/3	シルト	少量の地山土を粒～塊状に含。地山礫を含。	自然堆積土
6	明黄褐 2.5 Y 6/6	粘土		壁崩落土
7	黄褐 10 YR 5/6	シルト質粘土	少量の炭化物を粒状に含。	人為的埋土

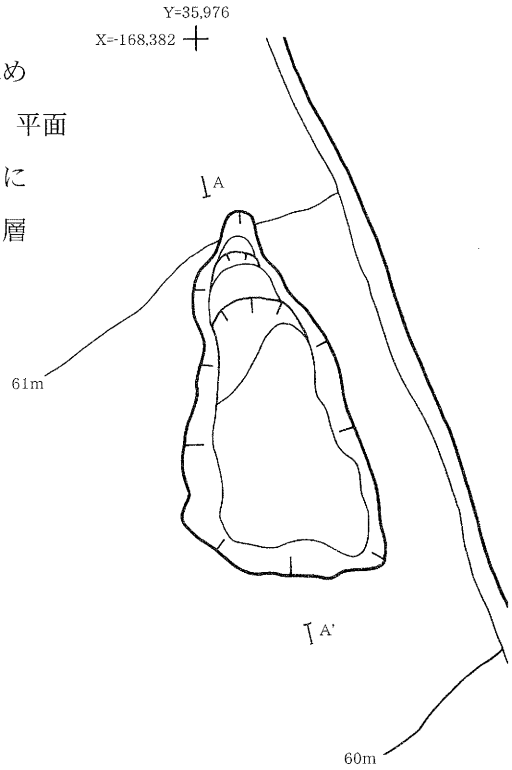
第 17 表　6 号土壙土層註記表

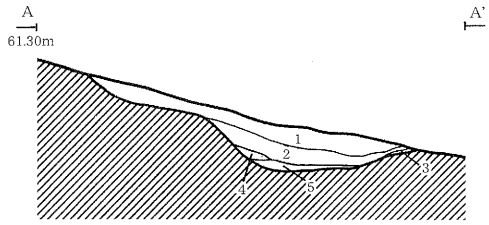
（７）７号土壙

調査区南西部斜面の基本層序Ⅳ層から確認された。重複は認められない。長軸 2.93 m，短軸 1.31 m，深さ 0.70 mの規模で，平面形は不整方形を呈する。底面は凹凸があり，長軸方向が階段状になっている。壁は急に立ち上がる。堆積土は５層に細分され，層 No.1 ～３・５は自然堆積層，層 No.4 は壁崩落土である。

No.	土色	土性	備考	大別
1	暗褐 10 YR 3/3	シルト	少量の地山土を粒状に含。	自然堆積層
2	褐 10 YR 4/4	シルト	少量の炭化物・地山土を粒状に含。	
3	にぶい黄褐 10 YR 5/4	シルト	少量の地山土を粒状に含。	
4	褐 10 YR 4/6	粘土質シルト		壁崩落土
5	暗褐 10 YR 3/3	粘土質シルト	少量の炭化物を粒状，地山土を粒～塊状に含。	自然堆積層

第 18 表　７号土壙土層註記表

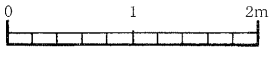


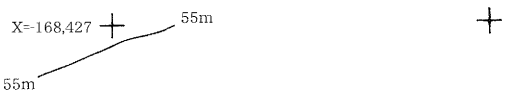


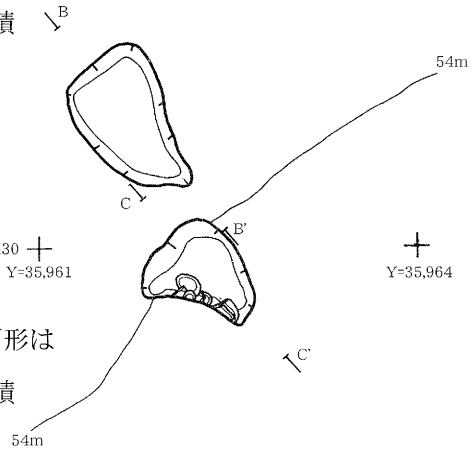
第 18 図　７号土壙

（８）８号土壙

調査区南西部斜面の基本層序Ⅲ層から確認された。重複は認められない。長軸 1.24 m，短軸 0.77 m，深さ 0.29 mの規模で，平面形は不整方形を呈する。底面は凹凸があり，壁は急に立ち上がる。堆積土は５層に細分され，層 No.1 ～４は自然堆積層，層 No.5 は壁崩落土である。







（９）９号土壙

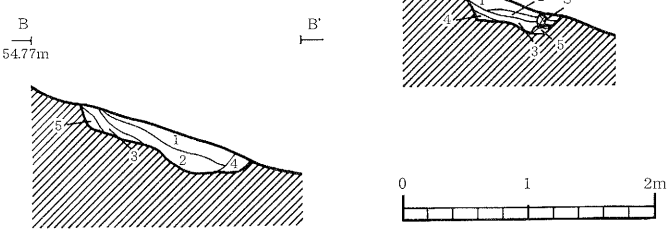
調査区南西部斜面の基本層序Ⅲ層から確認された。重複は認められない。長軸 0.91 m，短軸 0.65 m，深さ 0.38 mの規模で，平面形は不整方形を呈する。底面は凹凸があり，壁は急に立ち上がる。堆積土は４層に細分され，いずれも自然堆積層である。

No.	土色	土性	備考	大別
1	黒褐 10 YR 2/3	粘土質シルト	少量の炭化物・地山土を粒状に含。	自然堆積層
2	暗褐 10 YR 3/3	シルト	少量の炭化物を粒状，地山土を粒～塊状に含。地山礫を含。	
3	黄褐 10 YR 5/6	シルト	少量の暗褐 10 YR 3/3 シルト・炭化物を粒状に含。	
4	にぶい黄褐 10 YR 5/4	シルト	少量の炭化物を粒状に含。	
5	黄褐 10 YR 5/6	シルト	少量の暗褐 10 YR 3/3 シルトを斑状に含。	

第 19 表　８号土壙土層註記表

No.	土色	土性	備考	大別
1	暗褐 10 YR 3/4	シルト	少量の炭化物を粒状に含。地山礫を含。	自然堆積層
2	にぶい黄褐 10 YR 5/4	粘土質シルト	少量の炭化物を粒状に含。地山礫を含。	
3	にぶい黄褐 10 YR 5/4	シルト質粘土	少量の炭化物を粒状に含。多量の地山礫を含。	
3	にぶい黄褐 10 YR 5/4	シルト質粘土	少量の炭化物を粒状に含。多量の地山礫を含。	
4	褐 10 YR 4/6	粘土質シルト	少量の炭化物を粒状に含。	

第 20 表　９号土壙土層註記表

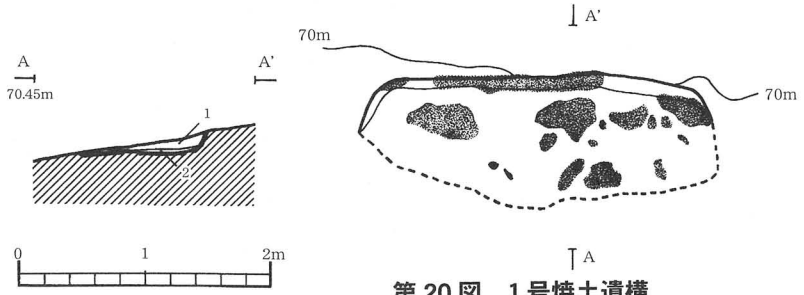


第 19 図　８・９号土壙

3. 焼土遺構

（1）1号焼土遺構

調査区北東部緩斜面の基本層序Ⅲ層から確認された。重複は認められない。長軸 2.80 m，短軸 1.00 m，深さ 0.21 mの規模で，平面形は隅丸長方形を呈する。底面は平坦で，壁は急に立ち上がる。堆積土は 2 層に細分され，層 No.1 は自然堆積層，層 No.2 は炭化物層である。底面と壁の一部が強い火熱を受け，赤変していた。



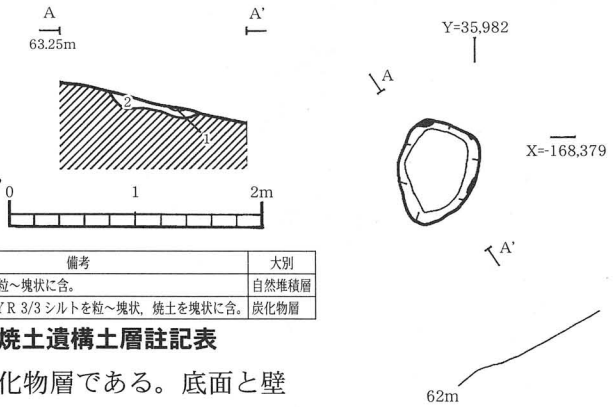
第 20 図　1 号焼土遺構

No.	土色	土性	備考	大別
1	黒褐 10 YR 2/2	シルト	少量の炭化物・焼土を粒状に含。細砂含。	自然堆積層
2	黒 10 YR 1.7/1	—	少量の焼土を粒～塊状に含。	炭化物層

第 21 表　1 号焼土遺構土層註記表

（2）2号焼土遺構

調査区南西部緩斜面の基本層序Ⅳ層から確認された。重複は認められない。長軸 0.81 m，短軸 0.62 m，深さ 0.13 mの規模で，平面形は不整方形である。底面はほぼ平坦で，壁は急に立ち上がる。堆積土は 2 層に細分され，層 No.1 は自然堆積層，層 No.2 は炭化物層である。底面と壁の一部が強い火熱を受け，赤変していた。



第 21 図　2 号焼土遺構

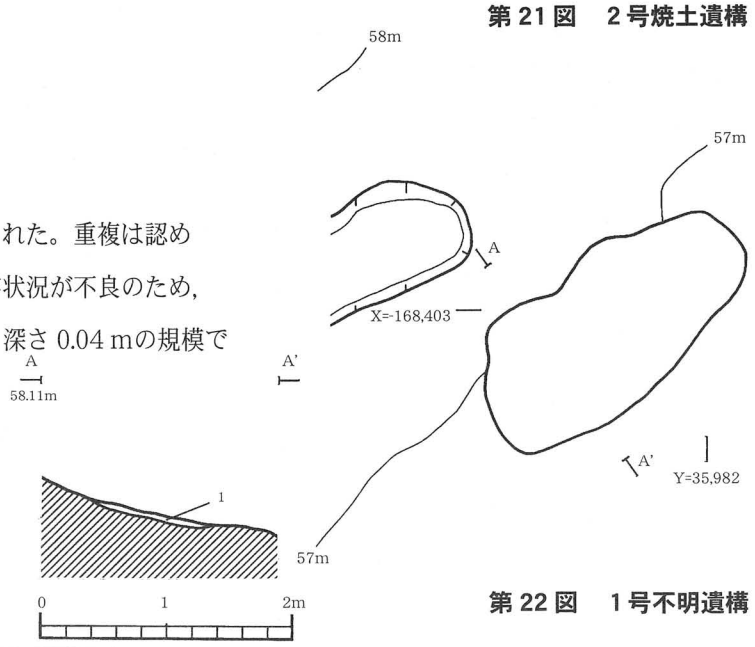
No.	土色	土性	備考	大別
1	暗褐 10 YR 3/3	シルト	少量の炭化物を粒～塊状に含。	自然堆積層
2	黒 10 YR 2/1	—	少量の暗褐 10 YR 3/3 シルトを粒～塊状，焼土を塊状に含。	炭化物層

第 22 表　2 号焼土遺構土層註記表

4. 不明遺構

（1）1号不明遺構

調査区南西部斜面の基本層序Ⅳ層から確認された。重複は認められない。当初は住居跡と考えていたが，遺存状況が不良のため，不明遺構とした。長軸 2.45 m，短軸 1.20 m，深さ 0.04 mの規模で残存し，平面形は正方形または長方形と推定される。底面はほぼ平坦で，壁は急に立ち上がる。堆積土は単層で，人為的埋土である。底面を平坦にするための盛土と考えられる。



第 22 図　1 号不明遺構

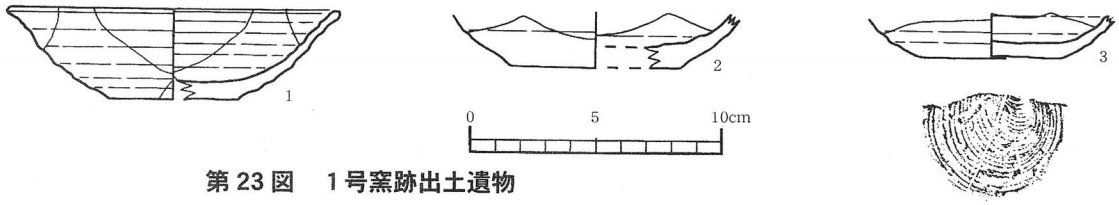
No.	土色	土性	備考	大別
1	褐 10 YR 4/4	シルト	少量の炭化物・焼土を粒状，地山土を粒～塊状に含。	人為的埋土

第 23 表　1 号不明遺構土層註記表

5. その他

以上の遺構と遺物の外に，平成 10 年度の確認調査で窯跡が 1 基発見された。これに伴い少量の遺物が採

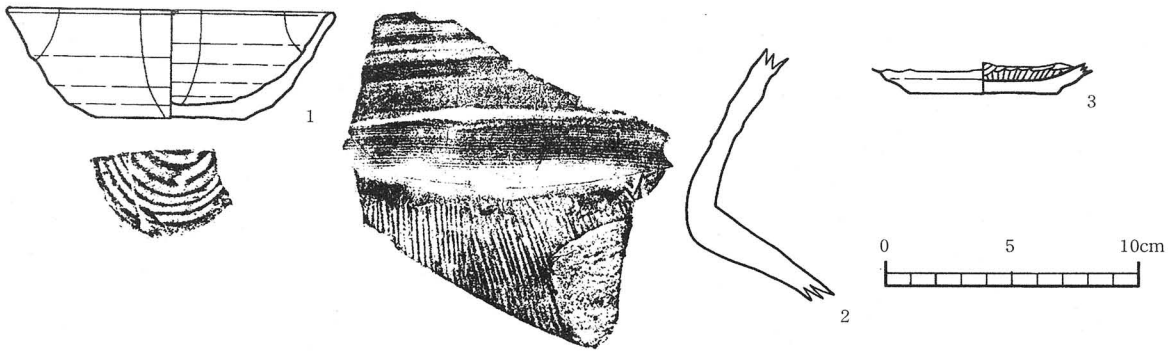
集された。また，調査区外からも窯跡が２基発見された。いずれも少量の須恵器を伴っていた。他に，調査区から土師器，須恵器，縄文土器が表面採集された。



第 23 図　１号窯跡出土遺物

No.	種別	層位	外面	底部	内面	口径・底径・器高(cm)	備考
1	須恵器坏	表採	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ	13.2・5.1・3.6	図版 16－1
2	須恵器坏	表採	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ	—・6.7・—	
3	須恵器坏	表採	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ	—・5.5・—	

第 24 表　１号窯跡出土遺物観察表



第 24 図　表採遺物

No.	種別	層位	外面	底部	内面	口径・底径・器高(cm)	備 考
1	須恵器坏	表採	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ	12.8・6.0・4.3	図版 16－2
2	須恵器甕	表採	ロクロナデ，タタキ	—	ロクロナデ，ナデ，抑え目	—・—・—	図版 16－3
3	土師器坏	表採	ロクロナデ	回転糸切り	ヘラミガキ，黒色処理	—・5.9・—	

第 25 表　表採遺物観察表

Ⅴ. 考察とまとめ

今回の調査では古代の遺物が出土した。量的に少ないため，検出された遺構の検討と併せて記していく。

（１）住居跡

住居跡は３軒検出された。１号住居跡は斜面の中程に位置する。本遺構にはロクロピットが設置されていた。ロクロピットは，土器製作時にロクロを設置するための穴で，粘土をのせる円盤とこれを支える軸木からなるものと推定される。上面径 53cm，小穴径 19cm，深さ 68cm（小穴上部まで 30cm）の規模で，平面形は円形を呈する。このようなロクロピットを伴う検出例は，第 26 表のとおりである。本遺跡では初の検出例となる。近接する関ノ入遺跡でもロクロピットは検出されているが，いずれも１個だけの検出となる。

ロクロピットの検出パターンとしては，①数箇所から検出された，②１軒の中から複数検出された，③①と②の複合型，④１個だけ検出された，の４通りが考えられる。この中で，①～③に該当する遺跡には青森県隠川(4)・(12)遺跡，岩手県南部工業団地内遺跡・相去遺跡・高前田遺跡・藤沢遺跡・藤沢（Ⅴ）遺跡・煤孫遺跡・瀬谷子遺跡，秋田県姥ヶ沢窯跡・郷土館窯跡，山形県平野山古窯跡群，宮城県日の出山窯跡群，福島県広網遺跡・大戸古窯跡群・大久保Ｆ遺跡などがある。この中で，青森県を除く東北５県の遺跡は，大規模な城柵官衙などへの土器の供給，あるいは一時的に相当数の土器生産が行われたものと考えられる。

県市町村名	遺跡名	調査年度	遺構名	時　　期	備　　考
青森県青森市	野木遺跡	平成10	水場遺構	平安時代	「蹴ロクロ」と考えられるロクロ回転盤。
〃　〃	〃	〃	第319号住居跡	９Ｃ中～９Ｃ後	「ロクロピット」。
〃　〃	〃	〃	第324号住居跡	９Ｃ中葉	
〃　〃	〃	〃	第347号住居跡	10Ｃ初頭	
〃　〃	〃	〃	第478号住居跡	９Ｃ中～９Ｃ後	「ロクロピット」。
〃　〃	〃	〃	第486号住居跡	〃	「ロクロピット」。「ピット上部にテラス」。
〃　〃	〃	〃	第702号住居跡	10Ｃ前	
〃　五所川原市	隠川（２）遺跡	平成11	第７号住居跡	９Ｃ末～10Ｃ初	東隅に多量の粘土塊。
〃　〃	隠川（４）遺跡	平成８	第１号住居跡	９Ｃ中～10Ｃ前	２基あり。明黄褐色粘土塊。
〃　〃	〃	〃	第３号住居跡	〃	「３層と４層が軸木固定用の充填土，5層が軸木痕」。
〃　〃	〃	〃	第４号住居跡	〃	２基あり。白色粘土塊。
〃　〃	〃	〃	第６号住居跡	〃	２基あり。「多量の自然礫が環状に固定」。
〃　〃	隠川(12)遺跡	〃	第２号住居跡	〃	「粘土塊が多量に出土」。
〃　〃	〃	〃	第４号住居跡	〃	「人為的な埋戻し」。
〃　〃	〃	〃	第５号住居跡	〃	粘土塊。
岩手県久慈市	鼻館遺跡	平成２	Ｆ４－ｈ	10Ｃ代	床面に多数の土器，粘土塊。工房跡。
〃　紫波町	杉ノ上Ⅱ遺跡	昭和48	ＢＪ 56(第２次)	９Ｃ前	工人の生産遺跡。白色粘土塊。
〃　北上市	相去遺跡	〃	第６地区４号址	10Ｃ後～11Ｃ前	２基あり。住居趾は４回の建替。
〃　〃	〃	〃	第８地区３号址	〃	集落内での土器生産。
〃　〃	高前田遺跡	昭和49	（５棟あり）	９Ｃ後～10Ｃ前	１棟の中に２～３基のロクロピットを持つものもある。
〃　〃	西野遺跡	昭和50	ＣＩ 50	10Ｃ後～11Ｃ前	第２期の住居跡に伴うもの。
〃　〃	藤沢遺跡	昭和63	ＳＩ 006	９Ｃ代	２基あり。「中心孔を持つ土坑」。周辺に生粘土の散布。
〃　〃	南部工業団地内遺跡	〃	（２棟あり）	10Ｃ代	土師器工房跡。
〃　〃	藤沢（Ⅱ）遺跡	平成元	ＳＩ 021	10Ｃ前後	「ロクロの施設として理解されている」。赤焼き土器生産。
〃　〃	煤孫遺跡	平成２	ⅣＢ６号	９Ｃ後？	３基あり。粘土塊。
〃　〃	藤沢（Ⅴ）遺跡	平成10	ＳＩ 401	—	２基あり。「断面漏斗状のピット」。
〃　江刺市	瀬谷子遺跡	昭和45	第２号工房跡	９Ｃ～10Ｃ	「陶土と見られる…白粘土」。
〃　〃	〃	〃	第３号工房跡	〃	「床面に炭化粒を含んだ灰白色の粘土」。
〃　〃	〃	〃	第４号工房跡	〃	「床面の各所に灰白色の粘土」。
〃　〃	〃	〃	第６号工房跡	〃	「灰白色粘土」塊。
〃　水沢市	林前南館跡	平成13	ＳＩ 0191	平安時代	白色粘土塊。
秋田県能代市	十二林遺跡	昭和63	ＳＩ 95	10Ｃ	「ロクロ軸受け」のピット。土器製作の工房的性格。
〃　〃	〃	〃	ＳＩ 108	〃	〃
〃　飯田川町	古開Ⅱ遺跡	平成12	ＳＫＰ 16	平安時代	「遺物とともに多量の焼土塊」。
〃　〃	〃	〃	ＳＫＰ 17	〃	「土師器坏の底部破片」。
〃　横手市	田久保下遺跡	平成３	ＳＩ 319	９Ｃ代	「ロクロを据え付けるためのピット」。
〃　〃	富ヶ沢Ｄ遺跡	平成４	ＳＩ 01	９Ｃ代	
〃　〃	郷土館窯跡	平成10	ＳＩ 36	平安時代	２基あり。
〃　〃	十二牲Ｂ遺跡	平成11	ＳＫ 32	９～10Ｃ	「(黒色)土を取り除くと轆轤の芯棒のようなピット」。
〃　〃	姥ヶ沢遺跡	平成12	ＳＫＰ 01Ｃ	９Ｃ後～10Ｃ	掘方覆土底面付近より土師器坏・甕がまとまって出土。
〃　〃	〃	〃	ＳＫＰ 324	〃	〃
山形県寒河江市	富山２遺跡	平成７	ＳＴ 38		北西壁の中央にあり。
〃　〃	平野山古窯跡群第12地点	平成９	ＳＰ 57	９Ｃ１四半期	「ロクロピットと思われる石組のピットと粘土塊」。
〃　〃	〃	〃	ＳＰ 65	〃	〃　　。
〃　〃	〃	〃	ＳＰ 84	〃	〃　　。
宮城県色麻町	日の出山窯跡群Ｃ地点	平成３～４	第２号竪穴住居跡	養老・神亀年間	２基あり。中央に径７㎝の棒状の痕跡。白色粘土塊。
〃　〃	〃	〃	第３号竪穴住居跡	天平11年前後	中央に径８㎝の棒状の痕跡。
〃　〃	〃	〃	第４ａ号竪穴住居跡	養老・神亀年間	２基あり。中央に径10㎝の棒状の痕跡。
〃　〃	〃	〃	第４ｂ号竪穴住居跡	天平11年前後	２基あり（重複）。中央に径約６㎝の棒状の痕跡。
〃　〃	〃	〃	第７号竪穴住居跡	天平11年以前	白色粘土塊。中央に径10㎝の棒状の痕跡。
〃　〃	〃	〃	第９号竪穴住居跡	天平11年前後	〃　　。　　〃　　。
〃　河南町	関ノ入遺跡	平成４	42号住居跡	８Ｃ４四半期	白色粘土塊。
〃　〃	細田遺跡	平成13	１号住居跡	９Ｃ後～10Ｃ初	白色粘土塊。台石。多量の礫。土師器甕。
福島県郡山市	広網遺跡	昭和59	５号住居跡	９Ｃ前～９Ｃ中	３基あり。いずれも中央に棒状の黒石土。
〃　〃	〃	〃	９号住居跡	〃	粘土塊。中央に径12㎝の棒状の黒色土。

福島県郡山市	広網遺跡	昭和59	24号住居跡	9C前～9C中	北西コーナーに粘土溜(1.9m×1.1m)。
〃　〃	〃	〃	28号住居跡	〃	ピット内に厚さ約4cmの炭化物(ロクロ台と思われる)。
〃　会津若松市	大戸古窯跡群（上雨屋7号窯）	平成2	1号須恵器工房跡	9C代～10C代	6基あり。中軸やや傾斜。周辺に白色の粘土溜。
〃　いわき市	大久保F遺跡	平成7	1号住居跡	9C4四半期	「ℓ1・2はロクロの軸受けの可能性が高く…。
〃　〃	〃	〃	3号B住居跡	〃	白色粘土塊。
〃　〃	〃	〃	4号B住居跡	〃	白色粘土塊。
〃　〃	〃	〃	7号住居跡	〃	2基あり。白色粘土塊。
〃　〃	〃	〃	8号住居跡	10C1四半期	白色粘土塊。
〃　〃	〃	〃	9号住居跡	9C4四半期	白色粘土塊。
〃　〃	〃	〃	10号住居跡	〃	白色粘土塊。

第26表　東北地方のロクロピット

これに対して，④に該当する遺跡には，①～③の遺跡と同じ性格であるが偶然にも資料数が乏しいために④に含まれるもの，①～③の遺跡における土器生産の補完的な役割を担う性格の遺跡，その郡域内の小規模流通などが考えられる。

須江窯跡群の一部である細田遺跡は，牡鹿郡家または牡鹿柵と推定される矢本町赤井遺跡をはじめとする牡鹿郡内へ須恵器を供給した遺跡と考えられる。これまでに須江瓦山窯跡から赤井遺跡に供給された瓦，あるいは須江窯跡群から赤井遺跡に供給されたとされる須恵器の量は，決して多くない。また，須江窯跡群の操業期間が8世紀後半から10世紀前半であるのに対し，官衙と推定される赤井遺跡「 期は8世紀初頭から9世紀前半であることから，重複期間が短く，城柵官衙などへの一時的な土器の大量供給の機会は少なかったものと考えられる。そこで，須江窯跡群は補完的な役割を担う遺跡の性格と郡域内の小規模流通の性格を有するものと推定される。

このロクロピットの堆積土中には数個の石があり，ロクロ回転台の軸受けを安定させるために用いられた可能性が考えられる。また，ロクロピットの周囲には40×25×15cmの精製された白色粘土塊をはじめとする粘土塊や作業用の台石として使用されたと推定される加工石が出土した。後述する土師器甕を含め，土器製作時にロクロピットを巡る一組の資料として考えられる。

遺物は，土師器坏・甕，須恵器坏が出土した。土師器坏は外面：ロクロナデ，内面：ヘラミガキ・黒色処理，底部：回転糸切りの表杉ノ入式のものが2点あり，1点は体部下半にやや内湾があり，もう1点は外湾しながらそのまま口縁部へ向かうタイプのものである。口径：底径比は，1：0.40である。いずれも9世紀代のものである。土師器甕は2点ある。1点は長胴形で，外面：ロクロナデ・ヘラ削り，内面：ロクロナデ・ナデの調整で，体部中央やや上が最も膨らむものである。もう1点が胴張形で，外面：ロクロナデ・ヘラ削り，内面ロクロナデ・ナデ，底部：削りの調整である。いずれも9世紀代のものと考えられる。この2点は，本遺構が使用されなくなった際にロクロピット内に廃棄されたものと推定される。須恵器坏は2点ある。いずれも底部から口縁部にかけて椀形にやや膨らみながら至るもので，口径：底径比は1：0.36である。ＳＥＫ1窯段階のものと推定される。

また，1号住居跡の堆積土からは915年に降下したとされる十和田ａ火山灰と推定される火山灰が多量に検出されており，これらを踏まえると，本遺構は9世紀第4四半期から10世紀初頭の年代が与えられる工房跡と推定される。

2号住居跡は，1号住居跡の南西側に隣接する。1号住居跡と同様に，堆積土からは多量の十和田ａ火山

灰と推定される火山灰が検出された。遺物は，土師器坏が出土した。外面：ロクロナデ，内面：ヘラミガキ・黒色処理，底部：回転糸切りの表杉ノ入式のもので，底部から口縁部にかけて椀形にやや膨らみながら至り，口径：底径比は１：0.42 である。

当初，１号住居跡と２号住居跡の関係は，会津大戸窯上雨屋７号窯跡地区の工房跡と住居跡に見られる関係を想定した。しかし，本遺構の出土遺物が１号住居跡のそれよりもやや古いと考えられるため，本遺構は９世紀第３四半期頃の住居跡または工房跡と推定される。

３号住居跡は,1 号・２号住居跡よりもやや高い位置にある。前記住居跡と同様に，堆積土からは十和田ａ火山灰と推定される火山灰が検出された。南西側に強い焼け面があり，カマドあるいは炉跡と推定される。

遺物は，土師器坏・甕，鎌と見られる金属製品が出土した。土師器坏は２点出土した。１点は外面・内面・底部の全てがヘラミガキ・黒色処理で，底部から口縁部にかけて椀形にやや膨らみながら至り，口径：底径比は１：0.45 である。もう１点は，外面：ロクロナデ，内面：ヘラミガキ・黒色処理，底部：回転糸切りである。土師器甕は３点出土した。２点は小型，１点は胴張形のものである。小型甕は外面：ロクロナデ・ヘラ削り，内面：ロクロナデ，底部：削り，のものと，外面：ロクロナデ，内面：ロクロナデ・ナデのものである。２点とも体部中央付近が最も膨らむ型のものである。胴張形の甕は外面：ロクロナデ・ヘラ削り，内面：ロクロナデ・ナデ，底部：削りのものである。体部下半のみの破片であるが，底部から口縁部に向かう外形線から推定して，最も胴の張る部分は体部中央よりもやや上にくるものと思われる。以上の組み合わせからなる土器は関ノ入遺跡１号住居跡に近いことから，本遺構は９世紀中葉から後半頃の住居跡または工房跡と推定される。

以上３軒の住居跡のうち，１号は工房跡，２号・３号は住居跡または工房跡の性格をもつが，全て工房跡とすれば，時期を変えて工房が同一斜面上に存在したこととなり，須江窯跡群が補完的な役割を担う遺跡であったことの補足資料になりうる。

（２）土壙

土壙は９基検出された。この中で，２号土壙は堆積土中に十和田ａ火山灰と推定される火山灰を含んでいる。１号・２号住居跡の並びにあり，遺物は土師器坏・甕の破片が出土した。坏は外面：ロクロナデ，内面：ヘラミガキ・黒色処理で，表杉ノ入式のものと考えられる。甕は外面：ロクロナデ・ヘラ削り，内面：ロクロナデ・ナデの体部の破片である。９世紀後半代の遺構と推定され，いずれかの住居跡に付属する施設と考えられる。

４号土壙からは，土師器坏の破片が出土した。性格は不明である。

５号土壙は，当初確認調査の段階では１号不明遺構と合わせて住居跡の可能性を考えていたが，事前調査時の精査の際，２基の遺構に分離することがわかった。本遺構は側壁下部と底面付近に広がる粘土を採掘するための穴とも考えられるが，性格・用途について詳細は不明である。時期も不明である。

６号土壙は，堆積土がシルトとシルト質粘土の互層からなる。本遺構は側壁下部と底面付近に広がる粘土を採掘するための穴とも考えられるが，詳細は不明である。また，堆積土の状況から見て精製過程の粘土を熟成させるための粘土溜の可能性も考慮した方がよい，とのご教示を遠藤寿哉氏から得た。時期は不

明である。

7号土壙は，側壁及び底面に広がる粘土を追うようにして掘ってあることから，粘土採掘坑跡の可能性が考えられる。時期は不明である。

この他の1号・3号・8号・9号土壙については，性格・用途及び時期について一切不明である。

（3）焼土遺構

焼土遺構は2基検出された。1号焼土遺構は比較的規模の大きなものになる。2号焼土遺構は小規模なものである。いずれも性格・用途及び時期は不明である。

（4）不明遺構

不明遺構は1基検出された。本遺構は，当初5号土壙と合わせて住居跡の可能性を考えていたが，事前調査の際，2基に分離することがわかった。本遺構はやや急な斜面に立地しており，その堆積土は人為的埋土で，固くしまっていた。そこで，この人為的埋土は平らな面を造り出すために置かれた整地層と考えられる。この整地層によって形成された整地面は，5号土壙につづく一連の作業面の可能性がある。遺物は，土師器坏・甕が出土した。坏は外面：ロクロナデ，内面：ヘラミガキ・黒色処理で，表杉ノ入式のものと考えられる。甕は長胴形のもので，外面：ロクロナデ・ヘラ削り，内面：ロクロナデ・ナデの口縁部と体部の破片である。1号・2号住居跡より古い9世紀代の土器作りに関連した遺構と推定される。

（5）その他

平成10・11年度の確認調査によって，平成13年度調査区の北側に須恵器窯を1基確認した。遺物は須恵器坏・甕が出土した。坏は，外面・内面：ロクロナデ，底部：回転糸切りで，口径：底径比は1：0.39である。甕は，外面：ロクロナデ・ヘラ削り，内面：ロクロナデ・ナデの体部の破片である。9世紀後半代の遺構と推定される。他に，南西側の隣接地に9世紀代の須恵器坏・甕の破片や窯体が散布していること，やや窪んだ場所があること，南西約200m先の道路法面に9世紀代の須恵器窯があることから，数基の須恵器窯の存在が想定される。

まとめ

今回の発掘調査で，以下のことが分かった。

(1)細田遺跡は，平安時代の生産遺跡と縄文時代の散布地で，複合遺跡であること。

(2)ロクロピットを持つ工房跡(1号住居跡)，粘土採掘坑跡と考えられる土壙が検出されたほか，窯跡も確認され，須恵器生産に関わる遺構が揃った。特に工房跡のロクロピットは，精製された白色粘土塊・作業用の台石として使用されたと推定される加工石・土師器甕が一組となって出土しており，工房内の状況の分かる好資料が得られたこと。

(3)細田遺跡は須江窯跡群の一部であり，9世紀後半から10世紀初頭にかけて須恵器の生産を行っていたと推定されること。

引用・参考文献（五十音順）

石井武政・柳沢幸夫ほか（1982.2）:「松島地域の地質」『地域地質研究報告』秋田（６）第89号　通商産業省工業技術院地質調査所

石田明夫（1993.3）:『会津大戸窯ー大戸古窯跡群発掘調査報告書ー遺構編』会津若松市教育委員会

石本弘・菅原祥夫ほか（1996.12）:「常磐自動車道遺跡調査報告８（大久保Ｆ遺跡）」『福島県文化財調査報告書』第330集
福島県教育委員会・財団法人福島県文化センター・日本道路公団

伊東信雄（1957.3）:「古代史」『宮城県史』第１巻　宮城県

稲野裕介（1989.3）:「藤沢遺跡」『北上市文化財調査報告』第54集　北上市教育委員会

稲野裕介（1990.3）:「藤沢遺跡（Ⅱ）」『北上市文化財調査報告』第58集　北上市教育委員会

岩手県教育委員会（1979.3）:「東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書ーⅢー（杉ノ上Ⅱ遺跡）」『岩手県文化財調査報告書』第35集
岩手県教育委員会・日本国有鉄道盛岡工事局

岩手県教育委員会・北上市教育委員会（1973.11）:『相去遺跡ー古代集落跡の発掘ー現地説明会資料』岩手県教育委員会・北上市教育委員会

大渡賢一（1999.3）:「藤沢遺跡Ⅴ（遺構編）」『北上市埋蔵文化財調査報告』第37集　北上市教育委員会

小山正忠・竹原秀雄（1990.6）:『新版標準土色帖』10版　日本色研事業株式会社

加藤竜（2001.3）:「古開Ⅱ遺跡ー日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る発掘調査報告書ー」『秋田県文化財調査報告書』第317集　秋田県教育委員会

河南町（1971.3）:「風土記御用書上」『河南町誌』下　河南町

神谷裕子・石田正明（1999.3）:「郷土館窯跡第３次」『横手市埋蔵文化財調査報告書』16　横手市教育委員会

木村高・三林健一（1998.3）:「隠川（４）遺跡・隠川（12）遺跡Ⅰ」『青森県埋蔵文化財調査報告書』第244集　青森県教育委員会

草間俊一（1971.6）:『岩手県江刺市瀬谷子遺跡　第３次緊急調査報告』　江刺市教育委員会・岩手県文化財愛護協会

小林芳行・佐々木政任ほか（2000.3）:「十二牲Ｂ遺跡ー県営ほ場整備事業（金沢地区）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書」
『秋田県文化財調査報告書』第304集　秋田県教育委員会

桜田隆・高橋学ほか（1992.3）:「秋田ふるさと村（仮称）建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書ー富ヶ沢Ａ・Ｂ・Ｃ窯跡　田久保下遺跡　富ヶ沢１号～４号塚ー（第２分冊）」『秋田県文化財調査報告書』第220集　秋田県埋蔵文化財振興会

佐々木志麻（2002.3）:「林前南館跡（19 ～ 21次）」『平成13年度水沢市遺跡発掘調査報告会資料』　水沢市埋蔵文化財調査センター

佐藤庄一・須賀井朋子（1998.2）:「平野山古窯跡群第12地点遺跡第２次発掘調査報告書」　財団法人山形県埋蔵文化財センター

佐藤敏幸（1991.3）:「御塩蔵場跡ー発掘調査報告書ー」『河南町文化財調査報告書』第５集　河南町教育委員会・建設省東北地方建設局

佐藤敏幸（1993.3）:「須江窯跡群　代官山遺跡」『河南町文化財調査報告書』第６集　河南町教育委員会

佐藤敏幸（1993.3）:「須江窯跡群　関ノ入遺跡ー陸奥海道地方最大の須恵器生産地ー」『河南町文化財調査報告書』第７集　河南町教育委員会

佐藤敏幸（1995.3）:「赤井遺跡ー牡鹿柵・郡衙擬定地ー」『矢本町文化財調査報告書』第３集　矢本町教育委員会

佐藤敏幸（1999.3）:「赤井遺跡ー牡鹿柵・郡家擬定地ー」『矢本町文化財調査報告書』第10集　矢本町教育委員会

佐藤敏幸（1999.3）:「須江窯跡群の窯業生産開始についてー瓦山窯跡出土の瓦をめぐってー」『石巻文化センター調査研究報告』第５号
石巻文化センター

佐藤敏幸（2001.3）:「赤井遺跡Ⅰー牡鹿柵・郡家推定地ー県道石巻鹿島台大衡線上区改良工事に伴う調査報告」『矢本町文化財調査報告書』第14集
矢本町教育委員会・宮城県石巻土木事務所

佐藤雄一（1986.11）:「６板碑」『わがまち河南の文化財』　河南町教育委員会

佐藤雄一（1997.8）:「河南町の板碑」『平成９年度河南町歴史大学』レジュメ　河南町教育委員会

志間泰治・桑月鮮（1991.11）:『宝ヶ峯』　斎藤報恩会

清水東四郎（1924.12）:「中山柵跡（佳景山）（桃生郡史跡）」『宮城県史蹟名勝天然記念物調査報告書』２

杉本良・稲野彰子ほか（1993.3）:「南部工業団地内遺跡Ⅰ　第１分冊　本文・実測図版」『北上市埋蔵文化財調査報告』第９集　北上市教育委員会

鈴木省三（1924.12）:「中山柵」『宮城県史蹟名勝天然記念物調査報告書』１

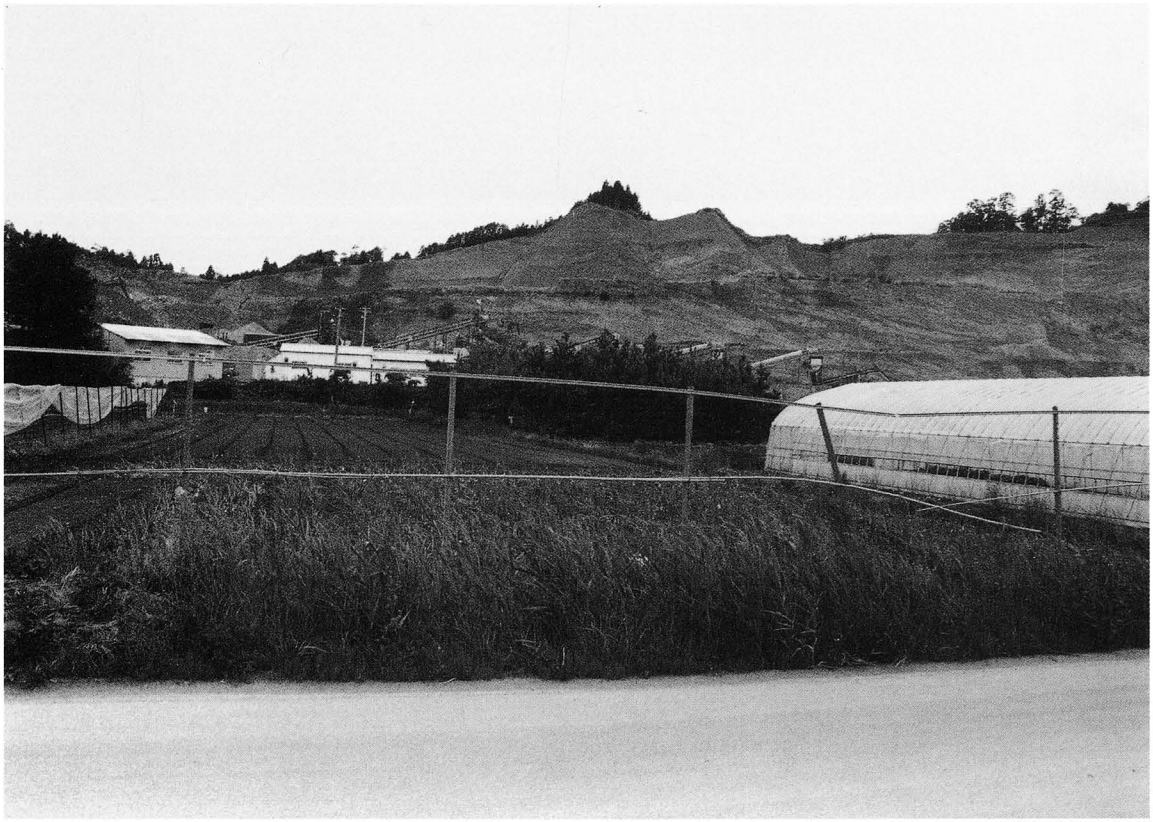
鈴木良仁・須賀井明子（1996.9）:「富山２遺跡発掘調査報告書」　財団法人山形県埋蔵文化財センター

高橋学・小林克（1989.3）:「一般国道７号八竜能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ—福田遺跡・石丁遺跡・蟹子沢遺跡・十二林遺跡—」

『秋田県埋蔵文化財調査報告書』第178集　秋田県教育委員会
高橋守克・阿部恵(1987.3):「須江糠塚遺跡」『河南町文化財調査報告書』第1集　河南町教育委員会
高松俊雄・柳沼賢治ほか(1985.3)「広網遺跡発掘調査概報」　郡山市教育委員会・(財)郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団
滝沢文教・神戸信和ほか(1984.3):「石巻地域の地質」『地域地質研究報告』秋田(6)第90号　通商産業省工業技術院地質調査所
東海林隆幹・佐々木嘉直(1994.3):「煤孫遺跡発掘調査報告書(第1分冊)」『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書』第196集
財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
中嶋友文・相馬良仁ほか(1999.3):「野木遺跡Ⅱ」『青森県埋蔵文化財調査報告書』第264集　青森県教育委員会
中嶋友文・相馬良仁ほか(2000.3):「野木遺跡Ⅲ」『青森県埋蔵文化財調査報告書』第281集　青森県教育委員会
中嶋友文(2002):「青森市野木遺跡のまとめ―竪穴住居跡について―」『研究紀要』第7号　青森県埋蔵文化財調査センター
中野裕平(1988.3):「須江関ノ入遺跡詳細分布調査報告書」『河南町文化財調査報告書』第2集　河南町教育委員会
中野裕平・佐藤敏幸(1990.3):「須江関ノ入遺跡―工業団地造成に伴う発掘調査概報―」『河南町文化財調査報告書』第4集　河南町教育委員会
中野裕平(1993.3):「群田遺跡」『河南町文化財調査報告書』第8集　河南町教育委員会
中野裕平(1994.6):「折損された板碑」『六軒丁中世史研究』第2号　東北学院大学中世史研究会
中野裕平・市川洋一(2000.3):「関ノ入遺跡・長者館跡―須江山浄水場配水池建設(増設)工事に伴う事前調査―」『河南町文化財調査報告書』第10集
河南町教育委員会・石巻地方広域水道企業団
中野裕平(2000.11):「御塩蔵場跡―三陸縦貫自動車道「矢本・石巻道路」施工に伴う事前調査―」『河南町文化財調査報告書』第11集
河南町教育委員会・建設省東北地方建設局
濱田宏・佐瀬隆ほか(1992.3):「鼻館跡発掘調査報告書　国道45号久慈バイパス関連遺跡発掘調査」
『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財報告書』第171集　財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
藤沼邦彦・小井川和夫ほか(1989.3):「宮城県の貝塚」『東北歴史資料館資料集』25　東北歴史資料館
藤原弘明・山口航生(2000.3):「隠川(2)外遺跡　発掘調査報告書―県営前田野目農免農道整備事業に伴う発掘調査報告書―」
『五所川原市埋蔵文化財調査報告書』第22集　五所川原市教育委員会
古川一明・太田肇(1993.3):「日の出山窯跡群―詳細分布調査とC地点西部の発掘調査―」『色麻町文化財調査報告書』第1集　色麻町教育委員会
細谷英男(1979.3):「東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書―Ⅱ―(西野遺跡)」『岩手県文化財調査報告書』第34集　岩手県教育委員会
松本彦七郎(1919.5):「陸前国宝ヶ峯遺跡の分層的小発掘成績」『人類学雑誌』34の5
松本彦七郎(1919.9):「宝ヶ峯遺跡について」『考古学雑誌』第9巻第9号　日本考古学会
水沢市埋蔵文化財調査センター(2001.8):「林前南館跡　第21次発掘調査現地説明会資料」　水沢市埋蔵文化財調査センター
宮城県教育委員会(1998.3):「宮城県遺跡地図」『宮城県文化財調査報告書』第176集　宮城県教育委員会
三宅宗議・進藤秋輝ほか(1987.3):「赤井遺跡第1次発掘調査報告」『矢本町文化財調査報告書』第1集　矢本町教育委員会
吉川孝(2001.8):「姥ヶ沢窯跡―農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業に係る発掘調査報告書Ⅱ―」『秋田県文化財調査報告書』第327集
秋田県教育委員会
――(1971):「仙台領内古城書上」『仙台叢書』別巻

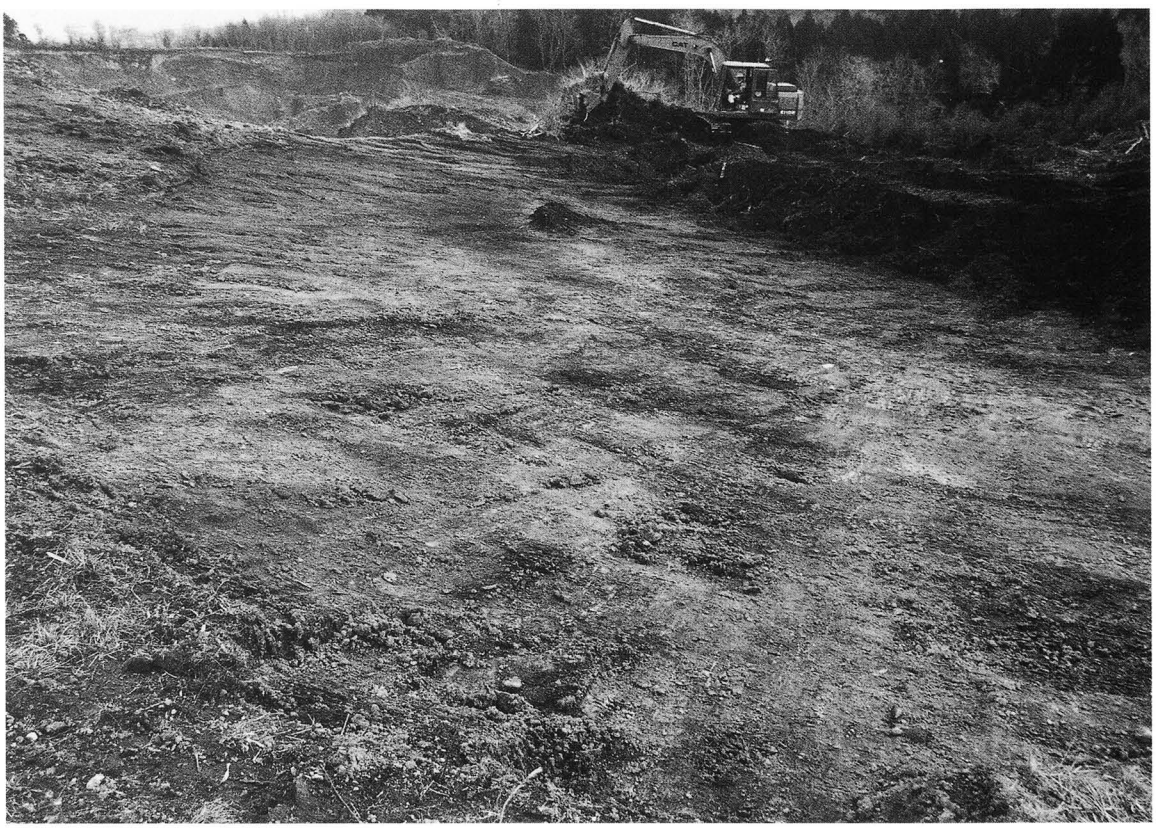
(註)　編著者名の記載については，日本国内の図書館における一般的な図書目録の記載方法に従い，同一図書における編著者(または団体)が2人までの場合は氏名(または団体名)全て，3人以上の場合はその図書を代表する2人の氏名のみの記載とし，3人目からは「ほか」の扱いとした。

写　真　図　版



図版 1 — 1　細田遺跡遠景

図版 1 — 2　表土除去作業（平成 10 年度）



図版２―１　表土除去作業（平成 13 年度）

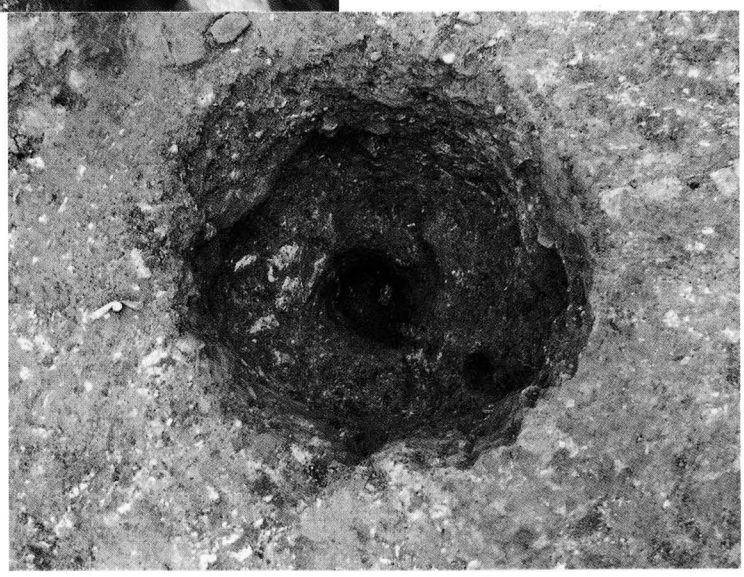
図版２―２　作業風景（平成 13 年度）

図版３―１　調査区完掘状況（１）

図版３―２　調査区完掘状況（２）

図版４―１　１号住居跡完掘状況

図版４―２　ロクロピット脇の白色粘土塊と作業用の台石と推定される加工石



図版４―３　ロクロピット完掘状況

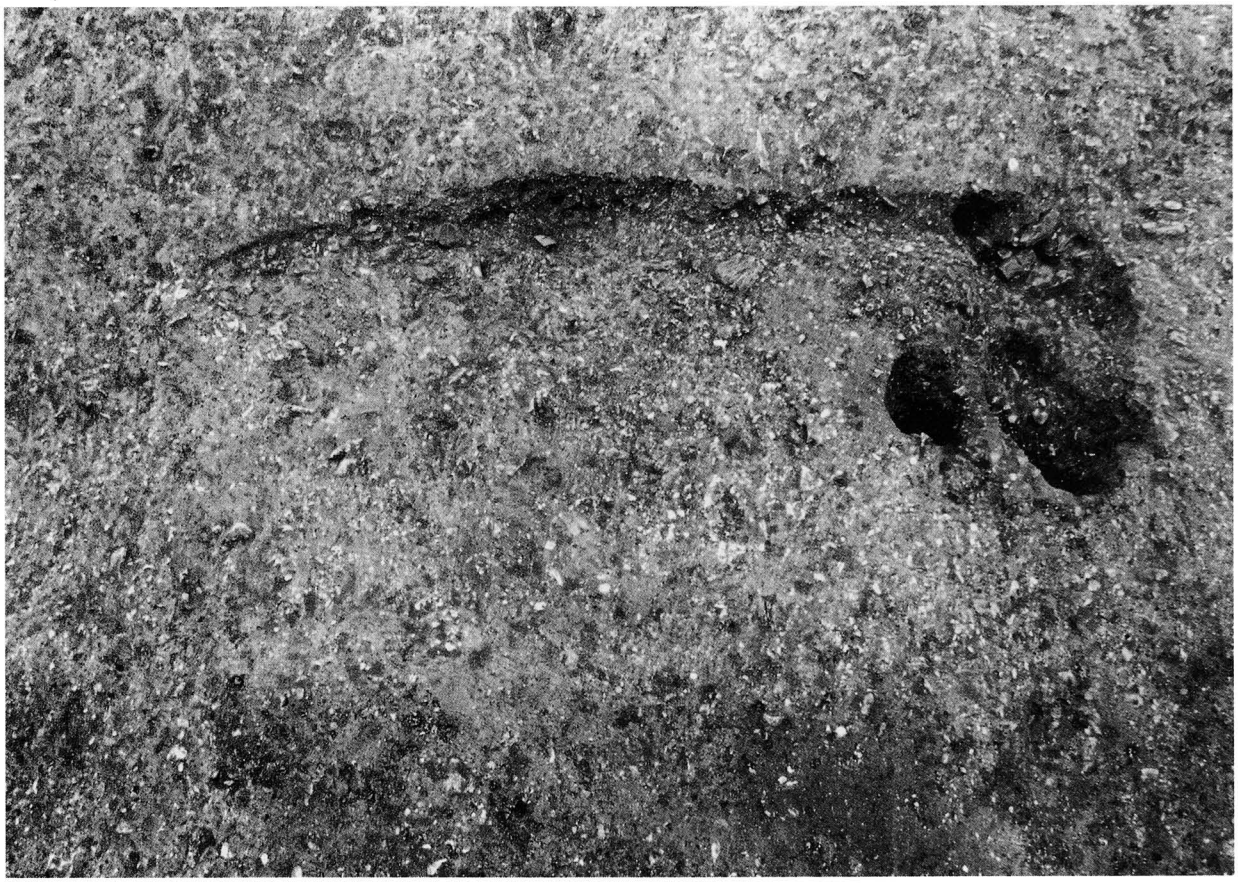
図版５―１　ロクロピット
発掘状況（１）

図版５―２　ロクロピット
発掘状況（２）

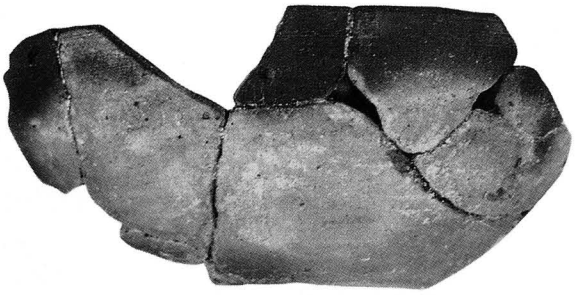
図版５―３　ロクロピット
発掘状況（３）

図版６　ロクロピット
断ち割り状況

図版７　１号住居跡出土遺物



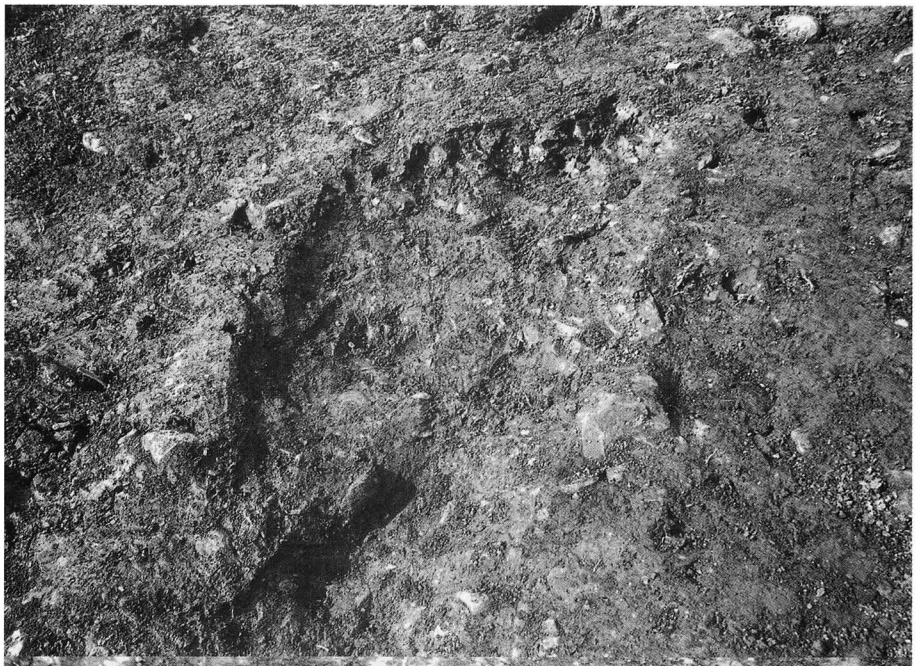
図版８―１　２号住居跡完掘状況



図版８―２　２号住居跡出土遺物

図版 9　3 号住居跡完掘状況

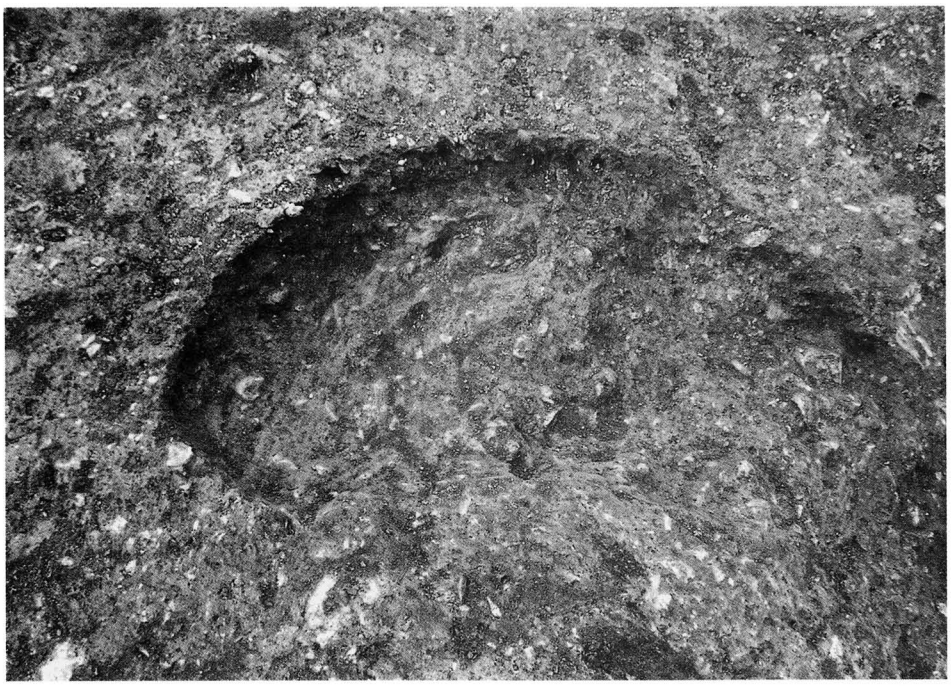
図版 10　3 号住居跡出土遺物



図版 11— 1　1 号土壙
完掘状況

図版 11— 2　2 号土壙
完掘状況

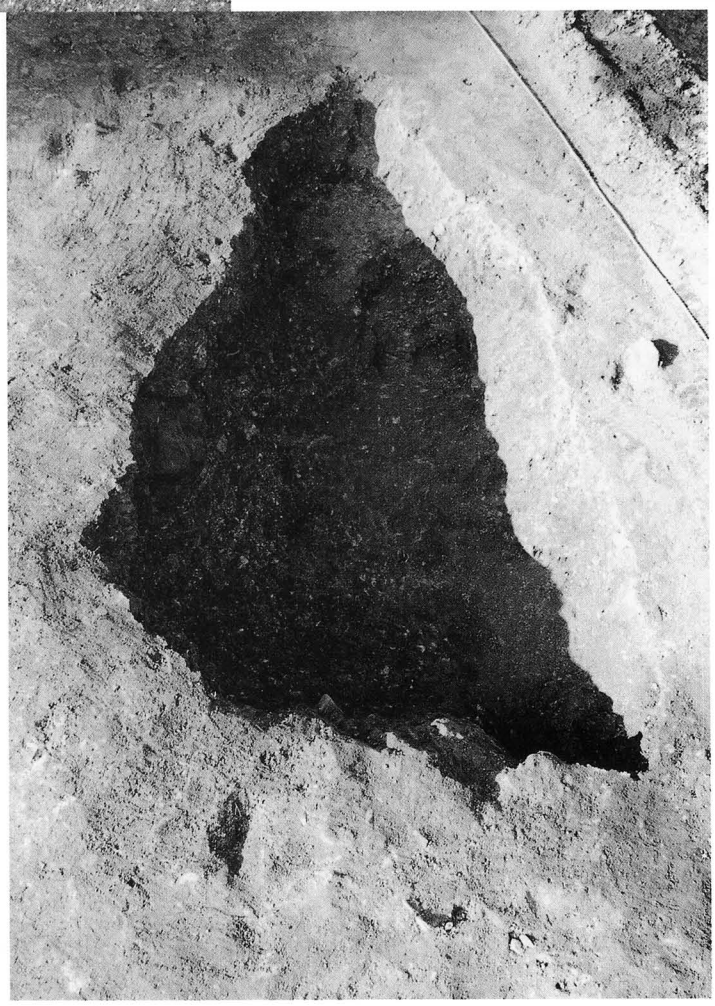
図版 11— 3　3 号土壙
完掘状況



図版 12—1　4号土壙
完掘状況

図版 12—2　5号土壙完掘状況

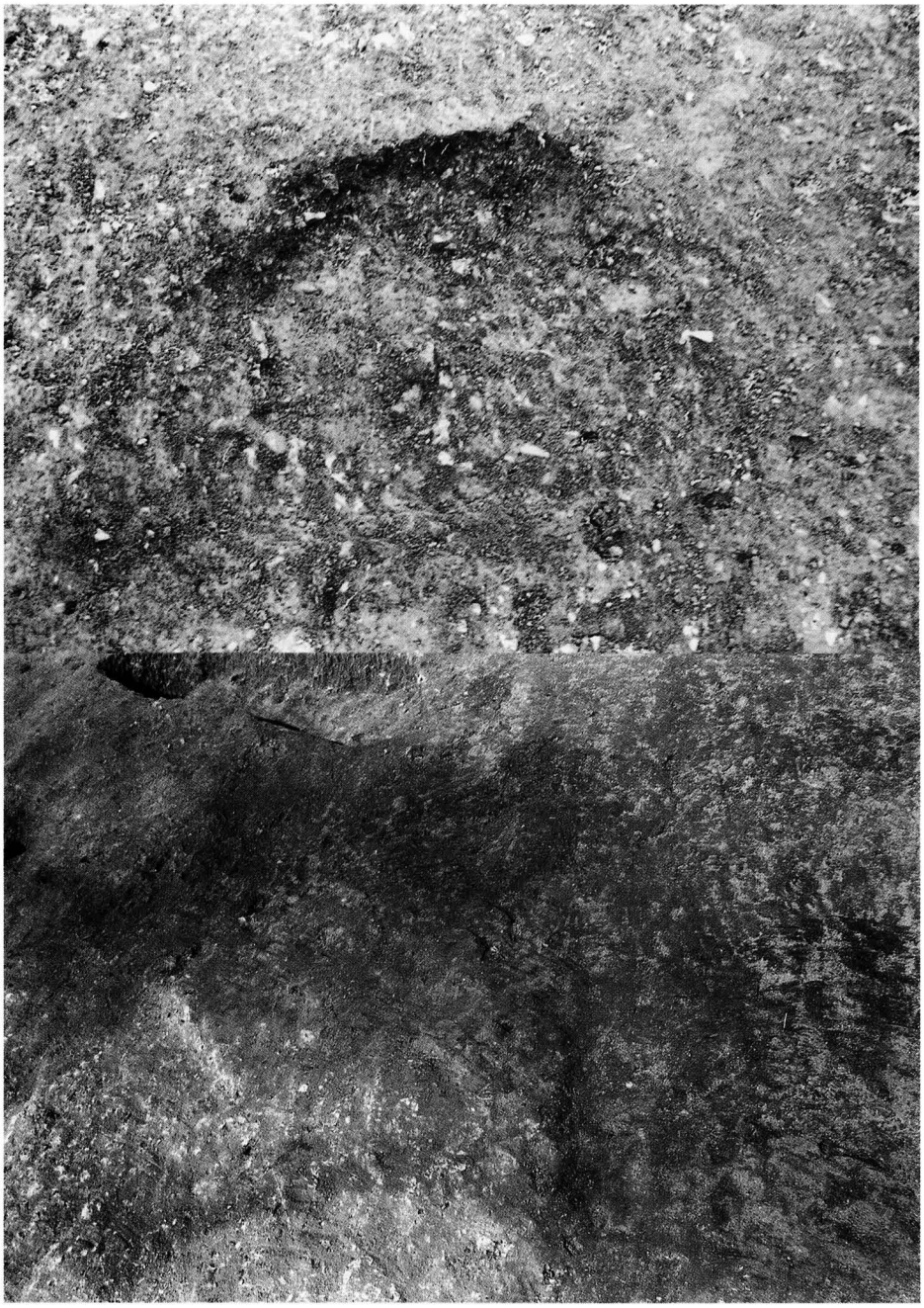
図版 13— 1　6 号土壙完掘状況



図版 13— 2　7 号土壙完掘状況

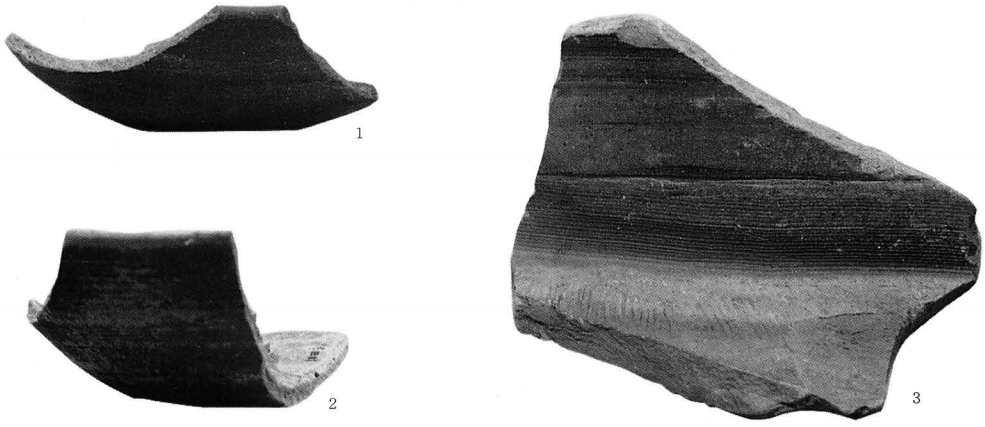
図版 14—1　8号土壙（上）
9号土壙（下）
完掘状況

図版 14—2　1号焼土遺構完掘状況



図版 15—1　2 号焼土遺構完掘状況

図版 15—2　1 号不明遺構完掘状況



図版 16　1 号窯跡及び調査区表面採集遺物

報 告 書 抄 録

ふりがな	ほそだいせき
書　　名	細田遺跡
副 書 名	細田採石工事に伴う事前調査
巻　　次	
シリーズ名	河南町文化財調査報告書
シリーズ番号	第12集
編 著 者 名	中野　裕平　・　市川　洋一
編 集 機 関	河南町教育委員会
所　在　地	宮城県桃生郡河南町前谷地字黒沢前７番地
発行年月日	平成14年12月27日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所 在 地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
ほそだいせき 細田遺跡	みやぎけんものう 宮城県桃生 ぐんかなんちょうす 郡河南町須 えあざほそだち 江字細田地 ない 内		69052	38° 24′ 48″	141° 14′ 35″	平成９年８月28日 ～ 平成９年９月４日 平成10年11月４日 ～ 平成10年11月６日 平成11年10月19日 ～ 平成11年10月22日 平成13年10月15日 ～ 平成13年12月７日	約5,700㎡	丸興産業株式会社による細田採石工事により削平を受けるため

所収遺跡名	種　別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特　記　事　項
細田遺跡	集落跡 生産遺跡	平安	竪穴住居跡	土師器・須恵器	ロクロピットと精製粘土・作業台と推定される石を伴う竪穴住居跡あり。

河南町教育委員会文化財関係出版物

『わがまち河南の文化財』昭和61年11月　P.1～201

『河南町文化財調査報告書』第1集「須江糠塚遺跡」昭和62年3月　P.1～110(在庫なし)

『河南町文化財調査報告書』第2集「須江関ノ入遺跡詳細分布調査報告書」昭和63年3月　P.1～27(在庫なし)

『河南町文化財調査報告書』第3集「須江関ノ入遺跡詳細分布調査Ⅱ」平成元年3月　P.1～25(在庫なし)

『河南町文化財調査報告書』第4集「須江関ノ入遺跡－工業団地造成に伴う発掘調査概報－」平成2年3月　P.1～67(在庫なし)

『河南町文化財調査報告書』第5集「御塩蔵場跡－発掘調査報告書－」平成3年3月　P.1～21(残部僅少)

『河南町文化財調査報告書』第6集「須江窯跡群 代官山遺跡－奈良，平安時代の須恵器生産遺跡－」平成5年3月　P.1～108(残部僅少)

『河南町文化財調査報告書』第7集「須江窯跡群 関ノ入遺跡－陸奥海道地方最大の須恵器生産地－」平成5年3月　P.1～230(残部僅少)

『河南町文化財調査報告書』第8集「群田遺跡」平成5年3月　P.1～72

『河南町文化財調査報告書』第9集「群田遺跡Ⅱ」平成10年3月　P.1～18(残部僅少)

『河南町文化財調査報告書』第10集「関ノ入遺跡・長者館跡－須江山浄水場配水池建設(増設)に伴う事前調査－」平成12年3月　P.1～52(残部僅少)

『河南町文化財調査報告書』第11集「御塩蔵場跡－三陸縦貫自動車道「矢本・石巻道路」施工に伴う事前調査－」平成12年11月　P.1～26(残部僅少)

『河南町文化財調査報告書』第12集「細田遺跡」平成14年12月　P.1～44

河南町文化財調査報告書　第12集

細　田　遺　跡

―細田採石工事に伴う事前調査―

平成14年12月27日　印刷
平成14年12月27日　発行

発行　河南町教育委員会
〒987-1101　宮城県桃生郡河南町前谷地字黒沢前7番地
TEL　0225(72)2111

印刷　株式会社鈴木印刷所
〒986-0861　宮城県石巻市蛇田字新谷地前121
TEL　0225(22)4101(代)